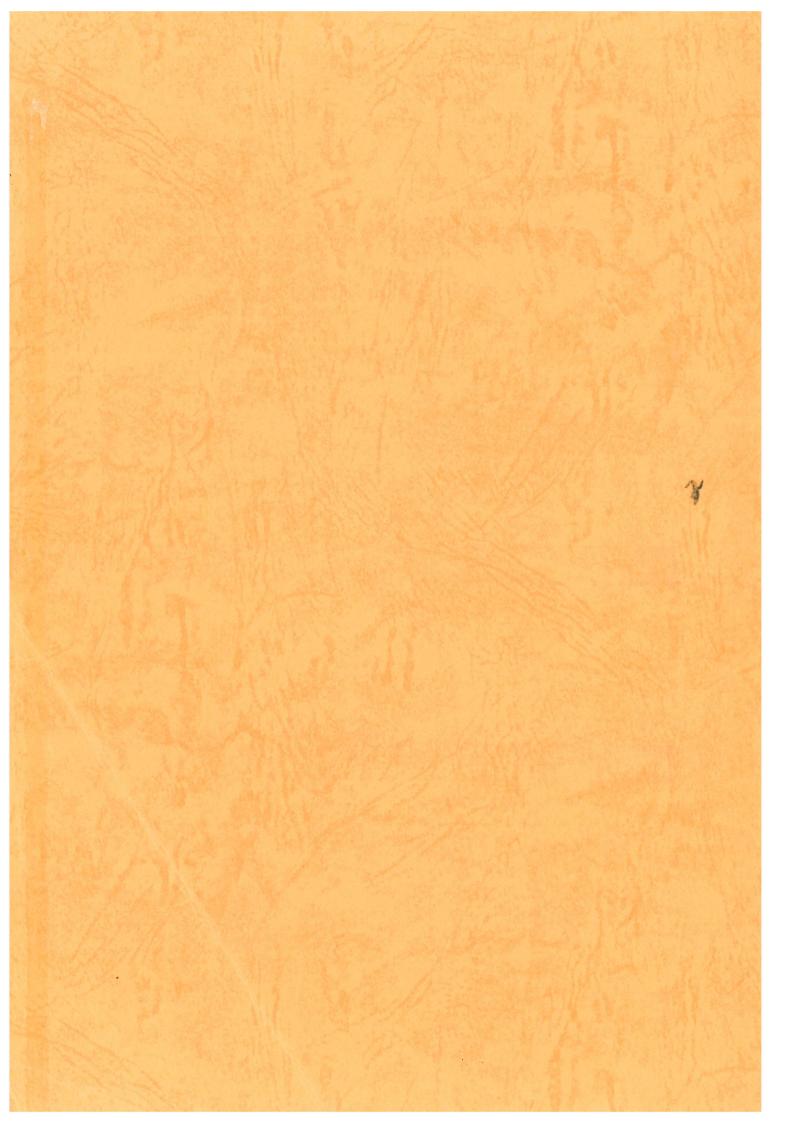
溝ノ口遺跡

(株)サカタのタネ研究棟及び付帯施設建設に先立つ埋蔵文化財発掘調査報告書

2000.3

掛川市教育委員会



溝ノ口遺跡

(株)サカタのタネ研究棟及び付帯施設建設に先立つ埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 0 0. 3

掛川市教育委員会

例 言

- 1. 本書は、静岡県掛川市吉岡字溝ノ口1746における溝ノ口遺跡の発掘調査報告書である。
- 2. 発掘調査は、(株) サカタのタネ掛川総合研究所センタ―の研究棟及び付帯施設の建設に先立ち 掛川市教育委員会が実施した。調査にかかわる費用は、(株)サカタのタネが負担している。
- 3. 発掘調査にかかわる期間は、以下の通りである。

発掘調査 1997年4月~1997年12月

整理調查 1997年12月~2000年3月

- 4. 現地調査、本書の執筆・編集は井村広巳が行った。第3章2節、第4章の縄文土器の執筆及び縄 文土器、石器の実測は、松本一男(掛川市役所)が行った。
- 5. 測量杭の設置は、(株) 玉野総合コンサルタントに、現地測量は(株) フジヤマに委託した。
- 6. 調査にかかわる諸記録及び出土遺物は、掛川市教育委員会が保管している。

例 凡

- 1. 挿図中の方位は真北を示す。
- 2. 挿図中の標高は海抜を示す。
- 3. 遺構の略号は以下のようにした。

SB:竪穴住居跡 SH:掘立柱建物跡 SK:土坑

S D:溝

SP: 柱穴

SΖ: 方形周溝墓

目 次

例言 凡例

第1章 調査経過

第1節 調査に至る経緯

第2節 調査経過

第3節 調査方法

第2章 地理的·歷史的環境

第1節 地理的環境

第2節 歴史的環境

第3章 調査内容

第1節 弥生時代

- 1. 竪穴住居跡
- 2. 掘立柱建物跡
- 3. 方形周溝墓
- 4. 溝
- 5. 土坑
- 6. 小穴

第2節 縄文時代、旧石器時代

- 1. 小穴
- 2. その他

第4章 調査の成果

第5章 おわりに

挿表目次

- 第1表 竪穴住居跡一覧表
- 第2表 掘立柱建物跡一覧表
- 第3表 土坑一覧表
- 第4表 小穴一覧表
- 第5表 縄文遺構一覧表

実測図版目次

- 第1図 遺跡の位置及び周辺遺跡分布図
- 第2図 遺跡周辺地形図
- 第3図 遺構全体図
- 第4回 弥生時代後期~古墳時代前期遺構配置図
- 第5図 SB01、02、03実測図
- 第6図 SB04~09、12実測図
- 第7図 SB04~09、12土層断面図
- 第8図 SB10、14実測図
- 第9図 SB11、13実測図
- 第10図 SB15~19実測図
- 第11図 SB15~19土層断面図
- 第12図 SB21、22実測図
- 第13図 SB23、24、25実測図
- 第14図 SB26~28実測図
- 第15図 SB28、SZ01遺物出土状態図
- 第16図 SB31~33実測図
- 第17図 SB31~33土層断面図
- 第18図 SB34~36、83実測図
- 第19図 SB34~36、83土層断面図
- 第20図 SB38、39実測図
- 第21図 SB40、41実測図
- 第22図 SB20、29、30、37、42実測図
- 第23図 SB43、SH08実測図
- 第24図 SB44~47、49実測図
- 第25図 SB44~47、49土層断面図
- 第26図 SB48実測図
- 第27図 SB50実測図
- 第28図 SB54~56、74実測図
- 第29図 SB54~56、74土層断面図
- 第30図 SB51~53実測図
- 第31図 SB59実測図
- 第32図 SB60、63、64実測図
- 第33図 SB60、63、64土層断面図、SB75実測図
- 第34図 SB61、62実測図
- 第35図 SB65実測図
- 第36図 SB66実測図
- 第37図 SB67実測図

44 00 M	000		7 0	17	० मंद्रामा ज्या
第38図	SB6	5 9	72	1	3 実測図

第39図 SB70実測図

第40図 SB76、77実測図

第41図 SB78、79実測図

第42図 SB80、82実測図

第43図 SB84、87実測図

第44図 SB85、86実測図

第45図 SH01、06実測図

第46図 SH02、07実測図

第47図 SH03実測図

第48図 SH04、10実測図

第49図 SH05実測図

第50図 SH09、11、12実測図

第51図 SZ01実測図

第52図 SK01、02実測図

第53図 SK03実測図

第54図 SK07、08、09実測図

第55図 SK05、06、10実測図

第56図 SP実測図 ①

第57図 SP実測図②

第58図 縄文時代遺構実測図

第59図 調查地周辺全体図

第60図 出土遺物実測図1

第61図 出土遺物実測図2

第62図 出土遺物実測図3

700因 田工医协关的因 0

第64図 出土遺物実測図5

第63図

出土遺物実測図4

第65図 出土遺物実測図6

第66図 出土遺物実測図7

第67図 出土遺物実測図8

第68図 出土遺物実測図 9

70000 日土医历人的因 0

第69図 出土遺物実測図10

第70図 出土遺物実測図11

第71図 出土遺物実測図12

第72図 出土遺物実測図13

第73図 出土遺物実測図14

第74図 出土遺物実測図15

第75図 出土遺物実測図16

第76図 出土遺物実測図17

第77図 出土遺物実測図18

第78図 出土遺物実測図19

第79図 出土遺物実測図20

第80図 出土遺物実測図21

第81図 出土遺物実測図22

第82図 出土遺物実測図23

第83図 出土遺物実測図24

第84図 出土遺物実測図25

第85図 出土遺物実測図26

第86図 出土遺物実測図27

第87図 出土遺物実測図28

第88図 出土遺物実測図29

第89図 出土遺物実測図30

第90図 出土遺物実測図31

写真図版目次

1 溝ノ口遺跡遠景(南から) 2 調査区全景(南から) 3 東半部完掘(垂直) 東半部完掘 (南から) 4 西半部完掘(垂直) 西半部完掘(北東から) 5 調査区全景(東から) SB01完掘(南から) 6 SB02床面検出(北から) SB02、03完掘(西から) 7 SB02、03、05~10完掘(南から) SB04、05完掘(北から) 8 SB04、05、06、08完掘(西から) SB04~10完掘(西から) 9 SB05~08完掘(北から) SB06~09完掘(北から) 10 SB10床面検出(北から) SB10完掘(西から) 11 SB11完掘(北から) SB13、SK01、02完掘(南東から) 12 SB14完掘(東から) SB20完掘(東から) 13 SB15~19、34~36、83完掘(北から) SB15、16、18、19完掘(北から) 14 SB15~19完掘(東から) SB17完掘(北から) 15 SB22完掘(南から) SB23、25完掘(南から) 16 SB24、26完掘(南から) SB23~28完掘(南東から) 17 SB28、SZ01遺物出土状態(東から) SB28、SZ01遺物出土状態(北から) SB28、SZ01遺物出土状態(北東から) 18 SB26~28完掘(西から) SB29、30、37完掘(南から) 19 SB31、32、33完掘(東から) 36 SB54~56、69~74床面検出

SB31完掘(北から)

20 SB33完掘(北から) SB33、34遺物出土状態(北から) SB33遺物出土状態(北から) 21 SB34、35完掘(北から) SB36完掘(北東から) 22 SB38完掘(西から) SB38遺物出土状態(北から) 23 SB39完掘(北から) SB39遺物出土状態(東から) 24 SB40、41 完掘(南から) SB40遺物出土状態(東から) 25 SB42 完掘(南から) SB43完掘(東から) 26 SB44~49完掘(東から) SB44~47、49完掘(北から) 27 SB48完掘(北から) SB48完掘(東から) 28 SB50完掘(北東から) SB51、52完掘(東から) 29 SB54~56完掘(東から) SB56遺物出土状態(南東から) 30 SB59、60完掘(北から) SB59遺物出土状態(西から) 31 SB59、60、63、64、74完掘 (北から) SB60、63、64完掘(東から) 32 SB61完掘(北から) SB61、62 完掘(東から) 33 SB63, 64, 67, 69 \sim 73 床面検出(北から) SB63、64、72~74完掘(北から) 34 SB65、SH07完掘(南西から) SB66完掘(南東から) 35 SB63、64、67~74完掘(北から) SB67完掘(北から)

(東から)

36 SB69~73完掘(東から) 55 SK01遺物出土状態(南から) 37 SB61~63、70~74完掘(南西から) SK01、02遺物出土状態(南東から) SB70完掘(西から) SK01、02完掘(北から) 38 SB70、72、73床面検出(北から) 56 SK03遺物出土状態(南東から) SB70、72、73完掘(北から) S K 0 3 完掘(南東から) 39 SB73完掘(北から) 57 SK07遺物出土状態(東から) SK07完掘(東から) SB73遺物出土状態(北から) 40 SB74完掘(北から) 58 SK08遺物出土状態(東から) SB59~74完掘(西から) S K 0 8 完掘(北から) 41 SB75完掘(南から) 59 SK09遺物出土状態(北東から) SB76~82完掘(南から) SK09完掘(南西から) 42 SB76、77完掘(南から) 60 C-5区SP125、126上面(南から) F-4区SP88 (東から) SB76遺物出土状態(北から) SB77P9遺物出土状態(南から) 61 D-5区SP09(南から) F-2区SP37(北から) 43 SB76~79完掘(東から) F-4区SP01 (南東から) SB78完掘(南から) 44 SB78、79完掘(南から) 62 G-5区SP38(北から) H-2区SP26 (北から) SB79完掘(東から) 45 SB76~83完掘(北西から) H-2区SP53(北西から) SB76~83、36完掘(北から) 63 B-3区SP32 (南から) 46 SB80、82 完掘(東から) B-3区SP32完掘(北から) G-4区SP11 (北から) SB80遺物出土状態(北から) 47 SB84、87完掘(東から) 64 C-3区SP25 (南東から) C-3区SP25完掘(南東から) SB84、87完掘(北から) 48 SB85~87完掘(東から) C-3区J3 (南から) 65 出土遺物 1 SB86P12遺物出土状態(北から) 49 SH01完掘(南から) 66 出土遺物 2 SH02完掘(北から) 67 出土遺物 3 50 SH03完掘(西から) 68 出土遺物 4 SH04完掘(南から) 69 出土遺物 5 51 SH05完掘(東から) 70 出土遺物 6 SH05P5 (北から) 71 出土遺物 7 SH05P7 (北から) 72 出土遺物 8 73 出土遺物 9 SH05P8 (東から) 52 SH06完掘(東から) 74 出土遺物10 SH08完掘(東から) 75 出土遺物11 76 出土遺物12 53 SH09、10完掘(北から) SH12 完掘(南から) 77 出土遺物13 78 出土遺物14 54 SZ01完掘(北から) 80 出土遺物16 SZ01完掘(北西から) 79 出土遺物15 81 出土遺物17

第1章 調査経過

第1節 調査に至る経緯

平成8年10月(株)サカタのタネより掛川市吉岡字溝ノ口1746外において、研究棟及び附帯施設の建設の計画がもちあがり、埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会を受けた。(株)サカタのタネ掛川総合研究センターが所在する地域は、縄文時代中期、弥生時代後期から古墳時代前期の遺跡として知られている溝ノ口遺跡、東原遺跡、中原遺跡が分布している。この周辺ではこれまでにも、埋蔵文化財に影響を及ぼす土地利用については、発掘調査が実施され、多数の竪穴住居跡や掘立柱建物跡が確認されている。したがって、今回の建設予定地でも同様のことが予想された。平成8年12月9日(株)サカタのタネより開発行為予備審査依頼書が掛川市役所に提出された。これを受け、(株)サカタのタネと掛川市教育委員会の協議の結果、平成9年4月から発掘調査を行うこととなった。

第2節 調査経過

- 平成9年3月19日 (株)サカタのタネより発掘調査の依頼書が掛川市教育委員会に提出される。
 - 4月16日 (株) サカタのタネと掛川市の間で埋蔵文化財発掘調査協定書及び埋蔵文化財 発掘調査委託契約書を締結する。
 - 4月18日 発掘機材の運搬を行う。
 - 4月21日 調査区南半部の重機掘削を行う。(~29日)
 - 5月1日 人手による粗掘を行う。この作業で竪穴住居床面が一部確認される。土器片も 多量に出土した。(~27日)
 - 5月9日 ベルトコンベアーを使用するため、動力電気の設置工事を行う。
 - 5月13日 (株) 玉野総合コンサルタントによる測量杭の設置が行われた。
 - 5月28日 遺構検出を行う。南西部分は、多数の小穴が認められた。竪穴住居跡は、ほとんどが切り合い関係があることが確認できた。(~6月12日)
 - 6月13日 遺構の掘削を行う。検出面からわずかに下げたところで床面を確認。竪穴住居 跡からの出土遺物は少ない。時間の制約があり、床面で測量することは省略し、 土層ベルトで床面を確認した。遺物の遺存が良好なものは適時作図し、写真撮 影を行った。(~7月31日)
 - 8月1日 2回目の重機掘削を行う。大半は近年掘り起こされ山砂利で埋め戻されていた ため、それを除去すると既に遺構面に達していた。(~9日)
 - 8月10日 夏休み文化財教室を実施。体験発掘を行った。
 - 8月11日 2回めの粗掘、遺構検出を行う。(~29日)
 - 9月1日 遺構の掘削を行う。(~10月29日)
 - 10月24日 (株)フジヤマによって調査区2/3の空中写真測量が行われた。

10月28日 遺構の完掘写真を撮る。(~11月7日)

11月7日 残りの空中写真測量を行う。

11月7日 空中写真測量の現地校正を行う。(~12月1日)

11月29日 遺跡の説明会を行う。210人が訪れる。

12月3日 現地調査すべて終了。

12月 整理作業を行う。(~平成11年3月)

第3節 調査方法

• 重機掘削

盛土は、重機 (バックホー) を用いて除去した。排土は、(株) サカタのタネ地内にダンプで運搬 した。排土の量が多かったため、盛土掘削と排土積み込みに1台ずつ重機を利用した。

・遺構検出

人手により最初は粗掘を行った。鍬と鋤廉を使用し、5 cmほど地表を掘り下げる。次に鋤廉を用いて丁寧に地表を削り遺構を検出した。

• 遺構掘削

検出した遺構は、移植ゴテ、竹ベラを使用して掘り下げた。遺構の切り合い関係を確認するために、 竪穴住居跡内にセクションを設定し、その新旧関係を確認することに努めた。遺物が集中して出土した場合、写真撮影を行った後、図を作成して取り上げた。

グリッドの設定

調査区は、国家座標にあわせて10m四方のグリッドを設定した。東西の列を東からA、B、C…のアルファベットで、南北の列を北から1、2、3…の数字にあてた。それぞれの交点をその杭の名称とし、グリッド名は北東角の杭の名称と一致させた。

・遺構実測

遺物出土状態図は1/10の縮尺で、平面図、土層断面図は1/20の縮尺で人手により作成した。1/20縮尺の遺構平面図は業者に委託し、ラジコンへリコプターを用いて空中写真測量を行った。

写真撮影

写真撮影には、6×7判(モノクロ)1台と35mm判(モノクロとリバーサル)2台を使用した。必要に応じてローリングタワーを使用した。調査区遠景、全景の垂直写真等の撮影は業者に委託し、ラジコンへリコプターを用いて写真撮影を行った。

整理作業

出土した土器は、表面がもろくなっているため水洗いした後、バインダー液につけた。その後、出 土位置をマーキングし、接合復元し、実測を行った。

現地で作成した図面は、報告書用に編集し清書した。発掘調査で得た成果を原稿にまとめ、印刷に付した。

第2章 地理的 • 歷史的環境

第1節 地理的環境

溝ノ口遺跡が存在する和田岡は、掛川市の最高点である八高山を源とする原野谷川が形成した河岸 段丘に位置する。段丘は特に西岸に発達し、北に位置する原泉、原田、原谷は小規模であるが、和田 岡に至ると東西約1.2 km、南北約2.2 kmに広がる。また東岸には独立段丘の岡津原が形成されてい る。そして段丘は、南方の各和から袋井市不入斗にかけても形成されている。

この段丘は、第四紀洪積世に形成された。砂岩、頁岩の他に一部シルト層を挟んで成り立っている といわれている。黒色又は暗褐色の表土の黒ボクの下には、粘質のある緻密な黄褐色土が堆積してい る。遺構は、この黄褐色土に掘りこまれていた。

段丘は、大きく分けて標高60m前後の吉岡原と呼ばれる上位段丘面と、標高40~50m前後の高田原と呼ばれる下位段丘面に区分される。当遺跡は上位段丘面である吉岡原に位置している。段丘は第2図のように、南西部に開析がみられ、小さな谷が幾つもいりくんでいる。

第2節 歴史的環境

和田岡地区のほとんどに、埋蔵文化財が所在するといっても過言ではない。それは第1図の周辺遺跡分布図を見ても明らかである。この地にみられる最も古い人々の痕跡は、吉岡下ノ段遺跡で採集された尖頭器である。これは堂山遺跡(原里)で採集された有舌尖頭器と同時期とされ、現在市内最古の石器である。縄文時代になると遺跡は少しずつ広がりをみせ、瀬戸山 I・II、向山、高田遺跡で押型文土器などが出土している。中期になると遺跡の数は増大し、最盛期を迎える。中原遺跡では竪穴住居跡が発見されている。その後、後・晩期になると和田岡では遺跡の数は減少する。

いったん途絶えていた人々の生活の営みが、再び遺跡として姿を現すのは弥生時代中期である。高田・吉岡原では遺構は伴っていないが、岡津原の岡津原遺跡や各和の山下遺跡では200mにも及ぶ墓域が形成されいる。現在のところこれらの墓域を形成した集団の集落は、段丘状では確認されていない。集落は周辺の低地に営まれていたと推定される。

弥生時代後期になると爆発的に遺跡は増加する。高田・吉岡原の段丘縁辺部には重複関係のある竪 穴住居群が至る地点で確認されている。集落は古墳時代前期に継続されるが、その数は減少する傾向 にある。しかし一方、近年の調査から、段丘の南に下がるにつれ古墳時代前期に集落の最盛期を迎え る遺跡も発見されてきた。東遠江では、弥生時代後期後半から沖積地に立地する遺跡が減少し、同時 に、台地上に多くの集落が営まれる傾向がある。この和田岡でもそれが如実に現れている。この時期、 東遠江一帯に社会的緊張が続き、段丘上に集落が営まれたと推定される。

古墳時代中期になると各和金塚、瓢塚、行人塚、吉岡大塚、春林院といった和田岡古墳群が造営される。また和田岡では、これらの首長墓の他に刀子などが供えられた長方形の掘り方をもつ土壙墓、 方墳、円墳などが認められている。前期まで継続して営まれていた集落は、中期になると姿を消している。現在、女高遺跡の竪穴住居跡1軒がこの時期のものとして確認されているにすぎない。和田岡古墳群を造営した集団は、社会的緊張が解け再び、低地へと集落の場を移していったと思われる。今後の沖積地の発掘調査がその様相を明らかにするであろう。今回の調査では、和田岡が最も繁栄していた弥生時代後期の集落の一部を窺えることとなった。

第3章 調查内容

全てのグリッドで遺構・遺物を確認した。中心となる時期は弥生時代後期から古墳時代前期で、竪穴住居跡87軒、掘立柱建物跡12棟、方形周溝墓1基、土坑10、小穴2,500余を数える。この他に縄文時代中期後半の小穴がある。また遺構に伴っていなかったが、掛川市内では初見である旧石器時代の石器と、弥生時代中期の土器片が出土した。

第1節 弥生時代

1. 竪穴住居跡

単独で検出されたものは少数であり、5~10軒がまとまり切り合い関係を持って存在した。調査区 南東角、南西部には小穴が集中し、竪穴住居跡は確認されなかった。この部分は、居住域からはずれ ると考えられる。また、調査区の中央部分は南北10mの幅で竪穴住居跡が見られないことから、竪穴 住居跡群は大きく東西に2分されると考えられる。出土遺物は、破片が大多数を占め、完形品となる ものは少なかった。時期を決定するため小片もできるだけ図示した。

SBO1 (第5·60図)

調査区中央南側のE、 $F-4\cdot 5$ 区に単独で位置する。形状は小判形であった。明確な貼床をもち、中央部分に特に強い貼床を持っていた。中央からやや北に炉は位置し、薄い焼土が2ヶ所で確認された。柱穴は $P1\sim 4$ の4本といえる。

出土遺物は、第60図 $1 \sim 4$ が覆土中から出土した。 1 は複合口縁の壷である。外面にわずかにタテハケが認められる。 2 は鉢である。口唇部には刻目を持たず、屈曲部に横ナデが施されている。 3 ・ 4 は鍔状口縁高坏である。 3 は坏部で、口縁部は折返し、刻目を持つ。 4 は脚部である。出土した土器から S B01の時期は、弥生時代後期菊川様式中段階といえる。

SB02 (第5·60図)

D、E-5区に位置する。SB03を切っている。形状は不整形な円形である。中央から北よりに平坦部をもち、その周囲は掘り下げられていた。平坦部の肩に炉が認められた。南西部分に強い貼床が認められた。柱穴は、対角線上にあるP1・3の2つが認められた。P4もSB02の柱穴の可能性がある。北東部では、小穴が確認されなかった。

出土遺物は、第60図 $5\sim7$ である。 $5\cdot6$ は床面から出土した。5 は台付甕である。口唇部はヨコハケが施され、細い刻目を持つ。胴部全体にススが付着していた。6 は、鍔状口縁高坏である。口唇部はヨコハケの後、刻目を持つ。坏部は、タテミガキの後、口縁部近くは横方向のミガキが施されている。7 は、天目茶碗である。後世の流れ込みである。

SB03 (第5·60図)

E-5区に位置し、SB02に東側を切られている。また、SD02に南側を切られている。形状は隅丸方形である。南側にテラスを持っていた。弱い貼床が認められ、中央から北よりに皿状の炉が認められた。南東部分の小穴が他の柱穴に比べ外側に位置しているが、柱穴はP5-8を利用したといえ

る。

出土遺物は、第60図8・9である。8は、P5から出土した小型の台付甕である。口唇部は面取りされ刻目を持つ。口縁部はゆるやかに屈曲する。外面全体にススが付着していた。9は、鍔状口縁高坏である。口唇部には縄文が施され、上端に刻目を持つ。坏部内面にはススが付着していた。出土した土器から、SB03の時期は、弥生時代後期菊川様式中段階であるといえる。

$SB04 \sim 10, 12$

D、 $E-4\cdot5$ 区に11軒が集中し、切り合っていた。

SB04(第6·7·60図)

D-5区に位置する。SB05を切り、SB12に切られていた。形状は隅丸長方形と推定される。中央部分に平坦部を残し、周囲は掘り下げられていた。平坦部とその周囲に強い貼床が認められた。西側をSB12に切られるため、下場は、なだらかになり貼床もない。炉は確認されなかった。柱穴は、P1~3の3本を検出した。北西部には小穴も認められなかった。

出土遺物は、第60図10~13である。10は、床面除去後出土した壷の破片である。全体にタテハケを施した上に、結節縄文を1段施し、その上に円形貼付文を付している。11は、SB04・12の重なる部分から出土した台付甕である。外面にススが付着していた。12・13は鍔状口縁高坏脚部である。12は、P3から出土した。脚部と坏部の境には櫛刺突羽状文が施されている。裾部の屈曲は明確である。13は坏部と脚部の境に櫛刺突羽状文が施された後、櫛押圧横線文が1条施されている。

SB05 (第6·7·60図)

D-5 区に位置する。 $SB04\cdot06\cdot12$ に切られ、大きさや形状は不明である。南側にはテラスを持つ。 $P6\sim8$ は南側の柱穴として考えられるが、北側は不明である。中央部に炉が認められるが、SB12 に切られ欠損していた。炉の南側には強い貼床が認められた。

出土遺物は、第60図14・15である。14は壷の頸部である。櫛押圧横線文を1条巡らし、羽状縄文を施した後、円形貼付文を付している。15は、SB06と重なる部分から出土した台付甕である。外面にススが付着していた。

SB06 (第6·7·60図)

D、E-5区に位置する。検出した当初、1軒と考えていたが、掘削を進めていくと3軒が重なることがわかった。SB06BがSB06Aを切っている。そして $SB05\cdot08$ を切っているが、SB07との切り合い関係は不明であった。A、B共に形状は不明である。SB06Aは南側に壁溝を持つ。明確な床面は検出できなかった。柱穴は $P11\cdot15\sim17$ の4本である。出土遺物は、小片のみで図示できなかった。

SB06Bは、2面の貼床を持っていた。上面の床面は弱く、点々として認められた。下面の貼床は、黄色の粘質を帯びた土が多く混じり、厚さもあり広い部分にわたって確認できた。この床面の住居跡は上面と同様にたち上がっており、規模を変えずに建て替えが行われたと考えられる。柱穴は4本で $P13\sim16$ といえる。貼床の高さから炉 a が上面の住居に伴い、炉 b が下面の住居に伴うことがわかった。

出土遺物は、第60図16である。複合口縁の壷又は鉢の口縁部である。SB06・07の重なる部分から出土した。

SB07 (第6·7·60図)

E-5区に位置する。SB09を切る。 $SB06 \cdot 08$ との切り合い関係は不明である。形状は隅丸方形と推定される。SB04と同様に中央に平坦部を残し、周囲は掘り下げられている。南側部分には良好な貼床が確認できた。炉は認められなかった。柱穴は東側の $P21 \cdot 22$ を確認したが、西側は不明である。

出土遺物は、第60図17・18である。17は台付甕、18は鍔状口縁高坏である。18の内外面にはススが付着していた。

SB08(第6·7·60図)

D、 $E-4\cdot 5$ 区に位置する。SB06Bに切られ、SB09を切る。SB07との関係は不明瞭である。ここでも新旧 2 軒が重なっていた。SB08A(内側)は、SB08B(外側)を切っている。SB08A の形状は隅丸方形と推定される。弱い貼床が一部に認められ、それはSB06の床面よりも低い。柱穴は、4 本で $P14\cdot 18\sim 20$ である。SB08に伴う炉は、確認できなかった。SB08Bは、Aよりも浅い掘り込みであった。北側の一部分を検出したのみで、形状、規模は不明である。

出土遺物は、第60図19の折返し口縁の壷である。口唇部には櫛刺突文が施され、その下方に刻目を 持つ。内面には、櫛描波状文が施されている。

SB09 (第6·7図)

 $E-4\cdot 5$ 区に位置する。SB07・08に切られている。形状は隅丸長方形と推定される。SB04・07同様、中央に平坦部を残し、周囲は掘り下げられている。北西部では壁溝が一部認められた。検出面で炉が確認されたが、明確な貼床はなかった。炉は、上面を黄色粘土で覆われ、その下にほぼ同じ厚さで焼土が広がっていた。柱穴は 4 本で、 $P22\cdot 24\cdot 26\cdot 27$ である。

出土遺物は、小片で図示できなかった。

SB10(第8·61図)

E-4 区に位置する。SB09との切り合い関係は不明であった。形状は小判形である。SB04・07・09同様に中央部に平坦部をもち、周囲は掘り下げられている。東辺、南辺の一部と西辺に壁溝が確認された。貼床、炉共に2面あり、建て替えが行われたことが認められるが、柱穴は検出できなかった。貼床は良好で、全域にわたって残っていた。上面の覆土には、炭化物が多く含まれていた。特に南東区に多くみられ、長さ60cmの炭化材が出土した。焼失家屋であったと推測される。

出土遺物は、第61図20~23である。20は、折返し口縁の壷である。口唇部には、ヘラ状工具による刺突文が施されている。内面にはススが付着していた。22は、鍔状口縁高坏である。口唇部には縄文が施され、端部の上下に刻目を持つ。内面にはススが付着していた。

SB12(第6·7図)

D-5 区に位置する。 $SB04\cdot05$ を切っている。SB06 との切り合い関係は不明である。形状、規模は全く確認できなかった。当初、この部分に住居跡があることがまったく想定できず、土層断面を観察していくなかで発見した。住居跡の1/3 を撹乱により失われている。貼床は、一部に認められた。出土遺物は、小片で図示できるものはなかった。

SB04~10・12の時期は、弥生時代後期菊川様式中段階の範疇に収まるものである。中段階の中でも、高坏の脚裾部には古い要素が見られる。この1群は、短期間に建て替えが繰り返されたといえよう。この1群のなかでの同時存在は、SB10とSB04のように離れた位置であれば、可能と考えられる。

という流れが認められる。

SB11 (第9·61図)

調査区のほぼ中央で最も南のF-5区に位置する。SD02に切られる。また、東側は野溜めにより破壊されていた。内側に建て替えが行われたことが、土層から確認できた。形状は小判形で、中央に平坦部をもち、周囲は掘り下げられていた。貼床は、南東部の一部分でのみ確認できた。炉は検出されなかった。柱穴は $P1\sim4$ の4本で、建て替えの際にも古い柱穴を使用したようである。

出土遺物で図示できたのは、第61図24の壷の頸部で、検出面から出土した。櫛描簾状文が施されている。

SB13(第9·61図)

調査区ほぼ中央、G-4区に位置する。S K01を切っていた。形状は、いびつな円形で中央から北東部にかけて、掘りこまれ低くなっていた。高低差は、平均 8 cm である。貼床は全体的に認められた。炉は中央からやや東よりに位置する。この炉は、周囲に黄色粘土が帯状に巡っていた。小穴は多数検出されたが、4 本でP $1\sim 4$ と考えられる。

出土遺物は、第61図25~27である。25は、内湾する折返し口縁の壷である。内面に単斜方向の縄文が施されている。26は、壷の胴部である。羽状縄文を胴部最大径まで施している。27は、鍔状口縁高坏である。折返し口縁で、端部上下に刻目を持つ。内面には、ススが付着していた。

SB14 (第8·61図)

H-4区に単独で位置する。形状は隅丸方形であり、中央に平坦面を残し、周囲は掘り下げられている。完掘時の高低差は、15 cmを測る。南西部分に貼床が認められた。南東隅には、直径30 cm、厚さ1 cmの焼土を確認した。柱穴は $P1\sim 4$ の4本である。

出土遺物は、第61図28~31である。28は、焼土下より出土した折返し口縁の壷である。端部は、櫛 状工具による刺突が施され、内面には羽状縄文が施されている。30は、単純口縁の壷である。口唇部 両端に刻目を持ち、端部には縄文が施されている。内面は、櫛描扇形文が施されている。31は、弥生 時代中期の甕片である。これらの出土土器からSB14の時期は、菊川様式中段階であるといえる。

SB15~19

G、 $H-3\cdot 4$ 区に 5 軒の竪穴住居跡が、相互に切り合い関係をもって位置する。

SB15 (第10·11·61図)

この1群の最も南、 $H-3\cdot 4$ 区に位置する。SB16に切られる。SB19との切り合い関係は不明

であった。形状は小判形である。貼床は南側部分に一部認められ、薄い焼土が南東部で確認された。 柱穴は、 $P1\sim404$ 本である。

出土遺物は、第61図32~36である。32は、折返し口縁の壷である。口唇部に縄文が施され、内面には櫛描扇形文が施される。34は、P4から出土した台付甕である。35は、焼土中に含まれていた弥生時代中期の甕の口縁部である。36は、軽石である。

SB16 (第10·11·61図)

G、 $H-3\cdot 4$ 区に位置する。 $SB15\cdot 19$ を切り、 $SB17\cdot 18$ に切られている。固い貼床がほぼ全域にわたって検出され、SB17の床面下からも壊されていない SB16 の貼床が確認できた。形状は隅丸長方形である。中央からやや東よりに炉が確認された。柱穴は 4 本と考えられるが、検出したのは $P5\sim 7$ の 3 つである。南東部分に小穴は確認されなかった。

出土遺物は、第61図37・38である。37は壷の肩部である。上から単斜方向の縄文、櫛描波状文、櫛描扇形文の順に施文されている。38は、単純口縁の壷である。SB16・17・18が重なる部分の床面下から出土した。口唇部に刻目を持つ。

SB17 (第10·11·61図)

G、H-3区に位置する。SB16、SK11を切り、SB18に切られている。形状は隅丸長方形である。貼床は弱いが、ほぼ全域にわたって確認できた。炉は中央から西よりに位置する。外側に黄色粘土が帯状に巡り、中央部分はドーナツ状に抜けていた。柱穴は、 $P5 \cdot P8 \sim 1004$ 本である。

出土遺物は、P8から出土した第61図39の台付甕である。口唇部は面取りされ、口縁部は、ゆるやかに外反する。刻目はない。外面にススが付着していた。

SB18 (第10·11·61図)

H-3区に位置する。SB16・17・19を切っている。この一群のなかで最も新しい住居跡であるが、 1 辺が 4 mに満たない小さなものである。形状は隅丸方形である。中央部にわずかな平坦面があり、 そこに炉は位置していた。貼床は、ほぼ全域にわたり均一に認められた。柱穴と考えられる小穴は、 検出できなかった。

出土遺物は、第61図40・41である。40は、覆土から出土した単純口縁の壷である。41は、壷の肩部である。櫛押圧横線文の下に単斜方向の縄文が施されている。

SB19 (第10·11·61図)

 $H-3\cdot 4$ 区に位置する。 $SB16\cdot 18$ に切られている。形状は不明である。西側の一部分のみ確認することができた。柱穴は、 $P12\sim 14$ と考えられる。

出土遺物は、第61図42・43である。42は、台付甕である。口唇部は、ハケによって面取りされている。外面には、ススが付着していた。43は、弥生時代中期の甕片である。

SB15~19の一群は、出土した土器から菊川様式中段階といえる。そして、この中で

S B 15 \

SB19→SB16→SB17→SB18 という変遷が認められた。同時存在はない。短い期間に建て替えが行われたといえる。

SB20 (第22·62図)

J-4区に位置する。東側半分を検出した。西側部分は調査区外へ及んでいる。形状は隅丸方形と 推定される。南東隅で小穴1を確認した。調査区内で炉は検出されなかったが、貼床が認められた。

出土遺物は、第62図44~46である。44は、単純口縁の壷である。口縁部は直線的に開き、図示したよりも傾斜する可能性がある。口唇部は縄文が施され、刻目を持つ。内面は櫛描扇形文が施されている。46は、台付甕である。口唇部は面取りされ、刻目を持つ。外面はハケ調整されているが方向性はない。ススが付着していた。

SB21~28

竪穴住居跡8軒で切り合い関係をもつが、すべてSZ01(方形周溝墓)に切られていた。

SB21 (第12·62図)

J-3 区に竪穴住居跡の1/4 が確認された。南東部はSZ01に切られ、西側は調査区外へ及んでいるため、形状、規模は不明である。SB22との切り合い関係は不明である。

出土遺物は、第62図47~49である。47・48ともに鍔状口縁高坏脚部である。48は、坏部と脚部の境にヘラ状工具による羽状刺突文が施されている。49は、弥生時代中期の甕の口縁部である。

SB22(第12・62図)

J-3区に位置する。南側はSZ01に切られていた。SB21・25との切り合い関係は不明である。 形状は小判形と推測される。中央に平坦面をもち、周囲は掘り下げられている。高低差は10cmを測る。 平坦部の周囲に貼床が認められ、中央から炉が検出された。柱穴は $P2\sim4$ の3つを検出した。実際 は4本であったが、SZ01掘削の際に破壊されたのであろう。

出土遺物は、第62図50~58である。50は折返し口縁の壷である。口唇部に刻目を持ち、その下方には指頭圧痕が認められる。内面は羽状縄文が施され、その下方にヘラミガキが行われている。同一個体の破片がS Z 01の覆土中から出土している。51は、壷の頸部である。1条の櫛押圧横線文を施している。53~55は、台付甕である。56は、鍔状口縁高坏の脚部である。脚端部はわずかに屈折している。57、58は弥生時代中期嶺田様式の土器片である。57は、赤色顔料が施されていた。

SB23 (第13·62図)

I、J-3区に位置する。S Z 01に切られ、S B 24・25を切っていた。形状は隅丸方形である。S B 22同様中央部に平坦面をもち、周囲は掘り下げられている。その高低差は10 cmを測る。中央から北よりに炉は位置する。南側部分に弱い貼床が認められた。柱穴は、炉の西側に 2 つの小穴を確認したのみで、他に住居跡内から確認できなかった。

出土遺物は、第62図59~62である。SB24と重なる部分から出土した。59は壷の胴部である。一部 欠損しているが、胎土、色調から同一個体といえる。胴部下半まで単斜方向の縄文が施されている。 底には、わずかに木葉痕が残っていた。60は、小型壷の底部である。61、62は台付甕の脚部である。 60、61は床面検出時に出土した。

SB24 (第13·62図)

I-3区に位置する。SB23に切られる。SB25との切り合い関係は不明である。形状は隅丸方形である。東辺、北辺が掘り下げられていた。貼床は認められなかった。柱穴は $P4\cdot6\cdot7$ を考えた

が、内側に入りすぎるため疑問である。

出土遺物は、第63図63の台付甕である。刻目を持ち、口縁部は、くの字に近い形で外反している。

SВ25 (第13図)

I、J-3区に位置する。 $SB22\cdot24$ との切り合い関係は不明である。中央部分をSZ01に切られ、南側をSB23に、北側をSB27に切られているため形状は不明である。柱穴は $P9\cdot10$ の2つが考えられる。

出土遺物は、小片で図示できるものはなかった。

SB26 (第14·15·63図)

 $I-2\cdot 3$ 区に位置する。S Z 01に切られ、S B 27を切っている。S B 28との切り合い関係は不明である。形状は方形である。弱い貼床が認められた。中央よりやや北よりに皿状の炉が位置する。柱穴は、P $1\sim 3$ である。南東部分に小穴は確認されなかった。

出土遺物は、第63図64・65である。64は、壷の胴部である。出土状態は第15図に示した。球形に近い形状である。全体にヨコハケ調整され、一部にはススが付着していた。65は、弥生時代中期白岩様式の高坏の口縁部である。外面は、丹塗りされている。66~68は、SB26・27の重なる部分から出土した。66は、壷の頸部で櫛描直線文が施されている。67は、壷の胴部である。櫛描直線文の下方に単斜方向の縄文が施され、その上に円形貼付文がみられる。68は、壷の肩部である。口縁部の屈曲部に凸帯が付けられている。胎土、色調が他の土器と異なり、その形状から西遠江からの搬入品であるといえる。

SB27(第14・63図)

I、 $J-2\cdot3$ 区に位置する。SB26・28、SZ01に切られ、SB25を切っている。形状は隅丸長方形と推定される。柱穴は、P4・5の2つを検出した。炉は確認されなかった。

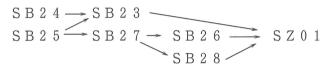
出土遺物は、第63図69~71である。69は内湾口縁部の壷である。口唇部は、面を持つ。70は、小型 壷の胴部である。表面は風化が進んでいるが、わずかに縄文が施されていることが認められた。71は 鉢である。口唇部は、面取りされている。口縁部外面はタテハケが施され、他はヘラミガキが行われ ている。

SB28 (第14·15·63~65図)

出土遺物は、第63~65図に示した72~90である。出土遺物の量は、検出した住居跡のなかで最も多く、北東部の壁付近からは、壷、甕、高坏が並んだ状態で出土した(第15図)。72~74は、折返し口縁部の壷である。72は、口縁部を大きく外反することなく、口唇部は丸く仕上げられている。内面と折返し部分は、ヨコナデされている。73・74は大きく外反する口縁部をもつ。74は、北東部土器集中群の一つである。口縁部が下になった状態で出土した。口唇部はヘラ状工具による刺突が施され、肩部には凸帯をもつ。また内面は、櫛状工具で放射状に描かれ、その内側に櫛描扇形文が施されている。

76~81は壷の胴部である。77・80・81は北東部土器集中群の一つである。77は、82の口縁を下にした 状態の台付甕内側から出土した。外面の一部にススが付着していた。80は、79とほぼ同じ文様構成で 上から櫛描簾状文、波状文、棒状工具押圧凸帯、羽状縄文と胴部下半まで施文されている。凸帯の下 には、2条の簾状文がみられる。また調整方法も丁寧で一次ハケの後、施文を行い、羽状縄文の下に 再びタテハケが施されている。81は、胴部中位まで施文され、沈線の下に櫛刺突羽状文、単斜方向の 縄文が施されている。78は、鉢とも考えられる。79は、SB27と重なる部分から出土している。凸帯 以外は、80と同じ文様構成である。頸部内側に簾状文風の波状文が施されていた。外面には、ススが 付着していた。82・83は台付甕である。82は北東部土器集中群の一つで、口縁部を下にし、77にかぶ るような状態で出土した。83は、小型の台付甕である。共に外面には、ススが付着していた。84~86 は、高坏である。84・85は鍔状口縁部の高坏である。85は、北東部土器集中群の一つで、口縁部を下 にした状態で出土した。86は、鉢型高坏である。口唇部は、面取りされている。一部分には、ススが 付着していた。89は、北東部土器集中群の一つで、大型の鉢である。口縁部は方形に折返されている。 体部は、ハケの後ナデ調整され、下半部はヘラミガキされている。内面はハケ調整で、口縁部に薄く ススが付着していた。90は、破片が竪穴住居内に広く散らばっていた。SB26と重なる部分から出土 した破片と接合された。口縁部は、直線的に立ち上がり、口唇部に面を持つ。胴部には細いハケ調整 が行われていた。これらの出土土器からSB28の時期は、菊川様式中段階といえる。

以上のことから下記のような関係がわかった。



出土土器からSB22・23・27・28は菊川様式中段階の時期であることが、わかっている。SB26は1個体ではあるが、新段階といえる胴部上位までハケ調整された球胴形の壷が出土していることから、この住居跡群の中で最も新しいと推定される。

SB29、30、37(第22·65図)

J-2・3区に3軒が切り合って位置する。

SB29

SB30に切られる。SH11、SB37との切り合い関係は不明である。形状は小判形である。弱い貼床が認められ、中央に皿状の炉が確認された。柱穴は確認できなかった。

出土遺物は、第65図91~93である。92・93は、高坏の脚部で床面から出土した。92は菊川様式の鍔状口縁の高坏の脚裾部で、細かいハケの後、粗いハケが施されている。93は、古墳時代前期の高坏である。

SB30

SB29を切っている。東側部分の一部を確認したのみで、中心部は調査区外へ及んでいる。形状、 規模は不明である。

出土遺物は、第65図94~96である、95・96は弥生時代中期のものである。

SB37

SB30に切られる。SB29との切り合い関係は不明である。住居のほとんどは調査区外へ及んでいる。出土遺物は小片で、図示できなかった。

SB31~36 · 83

G、H、I-2・3区に東西に長く竪穴住居跡 7 軒が切り合っていた。SB32を除く 4 軒は、1 辺が 5 mを越える規模の大きい一群であった。SB36の東にはSB77~79・83と、途切れることなく続いているが、ここでは東西に連なるSB31~36・83までを順に述べていくことにする。

SB31 (第16·17·66図)

この一群の西端、H、 $I-2\cdot3$ 区に位置する。SB33を切る。SB32との切り合い関係は不明である。形状は小判形である。南側を除き、周囲は溝状に0.1m掘り込まれている。強い貼床が、ほぼ全域で確認された。皿状の炉が2つ確認された。中央に1つ、それより北よりに1つと南北に並んでいた。高低差はない。柱穴は4本で10~7である。

出土遺物は、第66図97~105である。97は、複合口縁の壷である。口縁部には、櫛刺突文が施されている。98は、壷の頸部である。櫛押圧横線文を2条持ち、その下部に櫛刺突羽状文が施されている。100は平底の甕と思われる。口縁部は折返され、刻目を持つ。101は、鍔状口縁の高坏脚部である。坏部と脚部の接合部に櫛刺突羽状文が施されている。102~105は、弥生時代中期の土器片である。

SB32(第16・17図)

SB33 (第16·17·66·67図)

H、 $I-2\cdot 3$ 区に位置する。 $SB31\cdot 34$ に切られる。SB32との切り合い関係は不明である。形状は隅丸方形と推定される。北辺と東辺が周囲より $7\sim 10$ cm溝状に掘り込まれていた。強い貼床が認められた。炉は中央からやや北寄りに位置する。柱穴は、 $P15\sim 180$ 4 本である。

出土遺物は、第66・67図の106~120である。106~108は、折返し口縁の壷である。106は、口唇部に棒状貼付文を付し、その下に刻目を持つ。内面は、単斜方向の縄文の間に櫛描扇形文が施されている。107は、口唇部にハケを施した後、3本1単位の棒状貼付文を付す。内面は、櫛描扇形文が施されている。108は、107と類似しており口唇部に縄文が施された後、3本1単位の棒状貼付文を持つ。内面は単斜方向の縄文が施されている。108は貼床除去後、出土した。110は、床面検出時に出土した小型壷である。胴部に半截竹管文、櫛刺突羽状文が施されている。111~115は、台付甕である。111は、口唇部を丸く仕上げ、刻目を持つが、112~115は口唇部は面取りされ、刻目を持つ。外面には、ススが付着していた。113の脚部は焼けて赤変し、胴部下半はこげていた。113~116は、床面直上から出土した。出土状態は第17図に示した。116・117は高坏である。116は胎土、色調、形状から西遠江からの搬入品である。脚部には、5条の櫛描直線文が4段施され、3方の透かしを下方にもつ。117は、菊川様式鍔状口縁の高坏脚部である。118~120は、弥生時代中期嶺田様式の土器片である。

SB34 (第18·19·66図)

 $H-2\cdot 3$ 区に位置する。 $SB33\cdot 35$ を切り、SB36に切られる。形状は隅丸方形である。中央部に平坦面をもち、周囲は掘り下げられていた。高低差は、5 cmあった。所々に貼床が認められ、中央から北よりに炉が位置していた。柱穴は、 $P1\sim 6$ の 4 本である。

出土遺物は、第66図121~127である。121は、台付甕である。SB33から出土した破片と接合された。口唇部は磨滅しており、刻目を持つか不明である。口縁部はゆるやかに外反する。胴部には、ススが付着していた。122は、打製石斧に似た形状の石器で、両面が共によく研磨されたもので砥石状の研磨器と解する石器である。石材は砂岩で、長さ8 cm、幅3~4 cm、厚さ1 cm前後の大きさを測り、重さは50gを量る。123~127は、SB35と重なる部分から出土した。123、124は壷である。125・126は台付甕の脚部である。127は、 $SB34\cdot35$ の床下から出土した直径4 cm前後の球形をしたもので、表面全体がツルツルに仕上げられている。これは使用した結果、研磨されたような状態になったのか、それとも当初から研磨してそうなったのかわからない。石材は泥岩で、重さは76gを量る。同石材で一回り大きいものがB-3区SP24から出土している。

SB35 (第18·19図)

 $H-2\cdot3$ 区に位置する。SB34・36に切られ、南辺と北辺の一部分のみ検出された。形状、規模は不明である。SB33同様、中央に平坦面ををもち、周囲は掘り下げられている。高低差は $5\,\mathrm{cm}$ あった。平坦面には、長さ $20\,\mathrm{cm}$ 、厚さ $1\,\mathrm{cm}$ の小さな焼土が認められた。貼床は、わずかに認められた。柱穴は、 $P6\sim P9$ の4本である。出土遺物は小片で、図示できるものはなかった。

SB36(第18・19・66図)

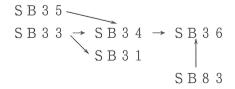
G、 $H-2\cdot 3$ 区に位置する。S B $34\cdot 35\cdot 83$ ϵ 切る。形状は隅丸方形である。固い貼床が、ほぼ全域にわたって確認された。中央から北よりに焼土が認められた。柱穴は、P $10\cdot 12\sim 14$ $0\cdot 4$ 本である。

出土遺物は、第66図128~132である。128~130は、壷である。128は折返し口縁で、口唇部には櫛刺突文が交差され、内面には口唇部と同様の文様と単斜方向の縄文が施されている。131は、搬入品で胎土・色調から西遠江の高坏の坏部といえる。132は鍔状口縁高坏の脚部である。裾部はハの字に開く。

SB83(第18・19図)

G-3区に位置する。 $SB36\cdot78$ に切られる。形状は不明である。検出された北辺と南辺の距離は 3mを測り、小さな竪穴住居跡である。柱穴は、 $P16\cdot17$ の 2 本と推定される。弱い貼床が認められた。炉は検出されなかった。出土遺物は小片で、図示できるものはなかった。

SB31~36、83の遺構の切り合いから下記のような関係がわかった。



SB38A·B(第20·68図)

B-4区に単独で位置する。当初1軒の竪穴住居跡と考えていたが、住居跡北側で炉が検出され、 またそれに伴う浅い掘り込みが認められたため、2軒が切り合っていたと推定される。

SB38A

北側の住居跡で、一部分のみ検出した。SB38Bに切られる。残された掘り方がわずかであったため形状は、不明である。SB38Bの炉よりも30cm高く、炉が検出された。貼床は認められなかった。SB38B

SB38Aを切る。形状は隅丸長方形である。貼床が認められ、炉は中心から西よりに位置する。竪穴住居内に小穴は確認されたが、柱穴と考えるには無理な配置であった。

出土遺物は、第68図133~135である。133は壷の頸部である。肩部には櫛押圧横線文が6条施され、内面は口縁部に向かって縄文が施されている。134は、床面から出土した台付甕である。口唇部は面取りされ刻目を持つが、それは全周するものの部分的に行われている。胴部は丸みがなく長い。胴部下半は赤変し、上部はススが付着していた。135は、鍔状口縁高坏である。出土した土器から菊川様式中段階がSB38Bの時期といえる。

SB39 (第20·68図)

B、C-3・4区に位置する。SH01に切られる。SH10との切り合い関係は不明である。形状は隅丸長方形である。貼床は南側部分によく残っていたが、北側ではほとんど確認できなかった。炉はなく、焼土が中心部と北西部に認められた。

出土遺物は、第68図136の台付甕である。口唇部は面取りされ、刻目を持つ。胴部にはススが付着 していた。

SB40 (第21·69図)

 $B-1\cdot 2$ 区に位置し、東部分は調査区外へ及んでいる。SB41を切る。形状は隅丸方形である。中央部には、東西に長く平坦部を持つ。この上に炉 2、焼土 2 が確認された。2 つの炉は切り合っているが、それに伴う 2 面の貼床は認められなかった。2 つの切り合う炉とその東側に存在する 2 つの焼土には、10cmの高低差があり、炉のほうが高い。第21図中に住居内の出土遺物の位置を表しているが、137の壷は焼土とほぼ同じ高さであった。他の番号は、炉と同じ高さであった。 $P1 \sim 7$ の小穴は柱穴と考えらる。炉が切り合い、焼土と高低差もあることから建て替えがあったと推定される。

出土遺物は、第69図137~144である。137は、単純口縁の壷である。口縁部は強くくの字に屈曲する。頸部と内面に結節縄文が施されている。138は、折返し口縁の壷である。口唇部に単斜方向の縄文、頸部には櫛押圧横線文を持つ。内面には、単斜方向の縄文が施されている。139は壷の胴部である。施文は上から櫛刺突文を2段、結節縄文を2段、その上に4または5で1単位の円形貼付文を持つ。その下方に規則性のない櫛刺突文が2段施されている。内面は、口縁部にわずかに櫛刺突文が見られる。140は、壷の胴部で、球形に近い形状である。141・142は台付甕である。142は、外面にススが、内面底にはコゲ痕が残っていた。143・144は、鍔状口縁高坏である。共に外面は、口縁部と坏部の境に接合痕の段が残っていた。内面は、ススが付着していた。口唇部はハケ調整が行われ、刻目を持つ。

SB41 (第21図)

 $B-1\cdot 2$ 区に位置する。 SB40、 SH04に切られる。 SB43との切り合い関係は不明である。形状はいびつな隅丸方形である。 貼床は確認できなかった。 焼土が中心部と南よりに、そして覆土中にも認められた。 柱穴は、 P8~11の4本である。

出土遺物は、小片で図示できなかった。

SB42 (第22·68図)

調査区の北東隅B-1区に1/4を検出した。中心は調査区外へ及んでいる。掘り込みが2段認められた。土層の堆積状況から外側に拡張されたことがわかった。明確な貼床は認められなかった。炉は、調査区内では検出されなかった。形状は隅丸方形と推定される。

出土遺物は、第68図145・146である。145は、複合口縁の壷、146は小型高坏である。これらの出土 土器からSB42の時期は、古墳時代前期といえる。

SB43~SB49

B、C-2・3区に7軒の竪穴住居跡と2棟の掘立柱建物跡が切り合って存在していた。

SB43 (第23·24·68図)

B、C-2区に位置する。SB41、SH08との切り合い関係は不明であった。当初1軒の家と考えていたが、土層断面の観察により建て替えを行っていることが認められた。建て替えにより南側へ拡張されていることがわかった。新しい住居跡の貼床は、ほぼ前面に残っていた。炉は中央からやや北寄りに東西3つ並んでいたが、高さから中央の炉が、古い住居跡に伴うものであるといえる。柱穴はP5~8が古い住居、P1~4が新しい住居のものと考えた。古い住居跡の南辺には、幅1m、深さ0.1mの溝状の掘り込みがあり、その覆土には焼土片が含まれていた。

出土遺物は、第68図147~150である。147は壷片である。単斜方向の縄文の下方に櫛描波状文を2段施している。148・149は台付甕である。150は弥生時代中期の嶺田様式の甕片である。出土した土器からSB43の時期は、菊川様式古段階といえる。

SB44 (第24·25·68図)

 $B-2\cdot3$ 区に位置する。 $SB47\cdot49$ を切っている。 $SB43\sim49$ の一群の中で最も新しい住居跡である。形状は小判形である。固い貼床が、ほぼ全面にわたり確認された。炉は、中央よりやや北に位置し、2つ重なっていた。また、炉の北側には焼土が認められた。北西部分には、壁溝と考えられる掘り込みをもつ。

出土遺物は、床面から出土した第68図151~153である。151は壷である。口縁部と頸部の境は明確に屈曲している。内、外面共に単斜方向の縄文が施されている。頸部外面は、タテハケの後ヨコナデ調整されている。153は鉢である。底は、わずかに輪状である。口唇部は、ハケで面取りされた後に、ヨコナデ調整されている。出土土器からSB44の時期は、菊川様式新段階といえる。

SB45 (第24·25図)

B-3 区に位置する。北辺の一部を確認した。竪穴住居跡の東半分は調査区外へ及んでいる。SB $47 \cdot 49$ 、SH09に切られ、SB46を切っている。形状は不明である。東側の土層断面より南北が

4.4mの規模であることがわかった。北辺には壁溝が確認された。所々に貼床が認められた。その貼床の高さから、東壁にかかる炉がSB45の炉と思われる。住居跡内に小穴を確認しているが、柱穴と認定できるものはなかった。

遺物は小片で、図示できるものはなかった。

SB46 (第24·25図)

B-3区に位置する。竪穴住居跡の東半分は調査区外へ及んでいる。 $SB45\cdot47\cdot49$ 、SH09に切られている。南西部のみの検出であるが、その形状は隅丸方形と推定される。規模は不明である。中央部分に平坦部を持ち、その周囲は掘り下げられていた。貼床は、東壁付近で確認された。炉はSH09のピットに切られていた。柱穴は $P6\sim8$ を想定したが、炉の位置を考慮すると西に片寄りすぎてしまうため、P6は該当しないであろう。

遺物は小片で、図示できるものはなかった。

SB47 (第24·25·70図)

 $B-2\cdot3$ 区に位置する。SB44に切られ、SB46・48を切っている。SB49との関係は不明である。形状は隅丸方形である。中央から西よりに広い平坦部を持ち、その周囲は掘りこまれていた。東辺と北辺の壁際には、溝状の掘りこみが認められた。貼床は南半部で良好に確認された。皿状の厚い炉が、中央から西よりに2つ、ほぼ同じ高さで認められた。貼床は1面で、2つの炉は同時に使用されていたといえる。柱穴は、 $P12\sim16004$ 本である。

出土遺物は、第70図154・155である。154は台付甕の脚部である。155は、床面から出土した黒色砂岩の扁平な自然石である。長径3.9cm、短径3.45cm、重さ29gである。地山に含まれる石ではなく、原野谷川で採集できる石である。用途は不明であるが、他に例を見ないためここに図示した。

SB48 (第26·70図)

B、 $C-2\cdot3$ 区に位置する。SB47、SH03に切られる。形状はいびつな隅丸長方形である。貼床は良好に認められた。中央から北よりに2段に重なる皿状の炉とその東側に単独の炉、北辺には焼土が3つ確認された。高さからみると、bの炉が高く、他は下位のcの炉とほぼ同じ高さであった。 貼床は1 面のみであったが、建て替えが行われたと推定される。下位に焼土が9く認められたが、覆土中には焼土片や炭化物は全く含まれていなかった。小穴は南東部から集中して確認されているが、他からは全く検出されなかった。

出土遺物は、第70図160~166である。覆土又は床面から出土したものが161・164~166である。161は、折返し口縁の壷である。口唇部は、ヘラ状工具による刺突文を持つ。内面は、単斜方向の縄文、櫛描波状文2段、その上に円形貼付文が施されている。164は、台付甕である。口唇部は丸く仕上げられている。166は、鍔状口縁高坏の坏部と脚部の接合部分である。櫛刺突羽状文が施されている。160・162・163は貼床除去後出土し、下位の炉に伴うものである。160は、単純口縁の壷である。内面に単斜方向の縄文を2段施している。162は、折返し口縁の壷である。下に垂下する折返し部分の粘土は、剥がれていて接合痕が残っていた。口唇部は櫛刺突文を交差させている。内面は、ハケの後、刺突羽状文が施されている。胎土に砂粒を多く含み、色調も赤褐色をしており、他の土器と異なっていた。163は台付甕である。口唇部は工具により面取りされ、刻目を持つ。外面にはススが付着し、内面下半にはコゲが認められた。

SB49 (第24·25·70図)

B-2・3区に位置する。SB44に切られ、SB45・46を切っている。SB47との関係は不明である。形状は隅丸方形である。固い貼床が北半部に認められた。SB44の掘り方下からも認められた。 炉は中央からやや北よりに位置し、SB44の柱穴に一部切られていた。柱穴は、P20~23の4本柱である。

出土遺物は、第70図156~159である。156~158は、SB44と交わる部分からの出土であるが、156は最下層からの、157・158はSB44の床面より下位で、SB49の炉と同じ高さから出土したため、SB49に伴う遺物と認定した。156・157は同規格の台付甕である。一見、同一個体ともみえるが、口唇部の面取りのハケ方向、刻目の原体の違いなど細部が異なっている。

以上SB43~49について述べたが、切り合いから下記のような関係がわかった。

$$S H 0 3$$

$$S B 4 8 \rightarrow S B 4 7 \rightarrow S B 4 4$$

$$S B 4 6 \rightarrow S B 4 5 \rightarrow S B 4 9$$

出土土器からもSB44が菊川様式新段階の要素をもっており、この一群は菊川様式の中段階から新 段階にかけて存続していたといえる。

SB50 (第27·70図)

C-2区に位置する。竪穴住居跡としては単独で存在するが、調査区を南北に縦断するSD01に切られている。形状は円形である。明確な床面は確認できなかった。SD01が中央を横切っているため、SD01掘削時に炉と柱穴の一つは失われたと推定される。柱穴は $P1\sim3$ である。

出土遺物は、第70図167~169である。167は壷の肩部、168・169は同一個体の小型壷である。胴部 下半は弱く屈曲している。

SB51~SB53

SB50の北側、 $C-1\cdot 2$ 区に3軒が切り合って存在した。

SB51 (第30・71図)

C-1区に位置する。SB52に切られ、SB53を切っている。形状は隅丸方形である。北東部は撹乱を受けていた。貼床は所々に確認されたが、南側の一部で2面の貼床が認められた。南東と北東の一部分で掘り方が2段になっているため、建て替えが行われたと考えられる。しかし土層断面からそれは確認できなかった。炉は確認されなかったが、P4に切られる小さな焼土が認められた。柱穴はP1~4の4本である。

出土遺物は、第71図170~173である。170は複合口縁の壷である。口縁部は、わずかに下に垂下している。口唇部には縄文が施されている。171は小型壷である。胴部下半は強く屈曲している。172は、 鍔状口縁高坏の坏部と脚部の接合部分で、櫛刺突羽状文が施されている。

SB52 (第30・71図)

C-2区に位置する。SD01に切られ、 $SB51\cdot53$ を切っている。形状は小判形である。貼床は、ほぼ全域に認められた。中央から北東よりに皿状の炉は位置する。柱穴は、南東部、北西部の $P1\cdot2$ が確認された。

出土遺物は第71図174~176である。174は折返し口縁部の壷である。折返し部分の断面は三角形である。口唇部には棒状貼付文を持つ。内面は風化しているが、縄文を施しているのがわずかに認められた。176は、P 1 から出土した台付甕である。口唇部はハケで面取りされている。全面にススが付着していた。

SB53 (第30図)

C-1区に位置する。SB51・52、SD01に切られる。撹乱を受けており、北側は調査区外へ及んでいるため、形状、規模は不明である。わずかにSB52北側でSB53の掘り方の一部分を検出した。 貼床は北側部分で確認された。調査区北壁の土層断面では、良好な貼床が認められた。Iの炉がSB53の炉と推定される。

出土遺物は小片で、図示できるものはなかった。

以上のことから次のような切り合い関係がわかった。 SB53→SB51→SB52→SD01

SB54~60,63,64,67~74

東半部の中央、C-3、 $D-2\cdot3$ 、 $E-2\cdot3\cdot4$ 区に13軒の竪穴住居跡群が切り合い関係をもち、密集して存在した。ここでは、順不同になるが図版ごとに記述していく。

SB54(第28·29·71図)

出土遺物は、第71図177の大型の折返し口縁の壷である。折返し部分が他と比べ厚く、指頭圧痕が 残る。口唇部には、ヘラ状工具による刺突が施されている。

SB55(第28·29図)

C、D-3区に位置する。SB56、SD01に切られ、南辺部の一部を検出した。形状、規模は不明である。貼床が確認された。柱穴は2方向の向きが考えられた。 $P4\sim8$ $EP9\cdot10$ である。住居跡の主軸が不明であるため、柱穴の方向も定められなかった。

出土遺物は小片で、図示できるものはなかった。

SB56 (第28·29·71図)

C、D-3区に位置する。 $SB54 \cdot 55$ を切り、SD01に切られる。SB74との切り合い関係は不明である。形状は隅丸方形である。SB54で述べたようにSD01のC $^{\prime}$ 下のふくらみは、SB56の北東コーナーにあたると考えられる。貼床は、柱穴と考えた $P11\sim 14$ の内側に認められた。中央に炉が、その左右に焼土が確認された。I の炉は、第29図中に示したように、厚い皿状の炉に焼土のブロックが立ち上がった状態で検出された。

出土遺物は、第71図178~182である。178・179は小型壷である。共に胴部下半が屈曲しないもので

ある。南西部壁際で白色の粘土ブロックが検出され、179はその下から出土した。180・181は床面より15cm高い位置から炭化材と共に出土した台付甕である。180は、胴部下半にススが付着していた。181は、口縁部にハケを施した後にヨコナデされている。出土土器からSB56の時期は、菊川様式新段階といえる。

SB57・58 欠番

SB74 (第28·29·74図)

D-3 区に位置する。 $SB64 \cdot 72 \cdot 73$ を切る。SB56 との切り合い関係は不明である。形状は隅丸方形である。北側に撹乱を受けていた。 $P15\sim20$ の4本の柱穴の内側に強い貼床が認められた。ほぼ中央に炉が位置する。

出土遺物は、第74図227~230である。227は単純口縁の壷、228は複合縁の壷であるが、共に外面にはススが付着していた。229は碗形の高坏である。口縁部は明確に屈折し水平に伸び、そこに櫛描波状文が施されている。内外面共にヘラミガキが行われ、丹塗りが施されていた。胎土も他と異なりその形状から、西遠江からの搬入品といえる。

SB59 (第31·72図)

D-2 区に位置する。SB60を切っている。形状は隅丸長方形である。貼床は、ほぼ全域にわたって認められた。炉は中央からかなり離れた南西部に位置していた。北東部分に焼土が多く認められ、床面直上に広がっていた。覆土中に炭化物は含まれていなかった。柱穴は、 $P2\sim4$ の3本である。北東部に $P1\cdot5$ が存在するが外へ広がるため、柱穴として使用されたか疑問である。

出土遺物は、第72図183~187である。186・187は床面より出土した。186の台付甕は、口縁部をゆるやかに屈折させている。187は、鍔状口縁高坏である。口唇部の上下に刻目を持つ。内面はヘラミガキが施されている。

SB60 (第32・33・72図)

D-2 区に位置する。SB59に切られる。SB63、SB64との切り合い関係は不明である。撹乱が深くまで及んでおり、覆土はわずかであった。形状は小判形である。貼床は確認されなかった。焼土は中央から北よりに位置する。柱穴は $P1\sim4$ の 4 本である。

出土遺物は、第72図188・189である。188は単純口縁の壷で、口縁部は逆ハの字形に直線的に開く。口唇部は面取りされ、櫛刺突文が施されている。内面は、タテハケの下に櫛描扇状文が2段施されている。189は、小型の鉢である。

SB63(第32・33図)

D-3区に位置する。SB64・74に切られる。SB60との切り合い関係は不明である。東辺、西辺の一部が検出されたのみで、形状、規模は不明である。貼床は確認されなかった。柱穴は、4本でP3・5・6・11である。P11は、掘り方の肩部にSB64の炉がのっていた。炉は中央から北よりに位置する。

出土遺物は小片で、図示できるものはなかった。

SB64(第32·33図)

 $D-2\cdot3$ 区に位置する。SB63を切る。覆土はわずかで、SB60、SB67との切り合い関係を確認できなかった。形状は隅丸方形である。貼床は確認されなかった。柱穴は 4 本で P 7~10 である。 炉はほぼ中央に位置する。

出土遺物は小片で、図示できるものはなかった。

SB67 (第37·73図)

 $E-2\cdot3$ 区に位置する。SB64との切り合い関係は不明である。SB72とは接している。形状は隅丸方形である。柱穴はP1・2・4・7の4本である。貼床は柱穴で囲まれた内側に認められた。炉は2段重なって、ほぼ中央に位置する。土層断面では確認できなかったが、北辺の掘り方が2段になることから、建て替えが行われたと考えられる。

出土遺物は、第73図212・213である。213は鍔状口縁の高坏脚部で、床面から出土した。 櫛刺突羽 状文の下に櫛押圧横線文が施されている。

SB70 (第39·73図)

 $E-3\cdot4$ 区に位置する。SB69、SH06に切られる。SB72との切り合い関係は不明である。SB73とは接する。形状は楕円形である。周囲を溝状に1周掘り込み、中央部を高く残していた。検出面で炉が認められ、貼床はなかったが、検出面が床面と考えられる。皿状の炉は、中央から北よりに位置していた。柱穴は4本でP1~4である。P3は、SH06の柱穴と共有され、拡張されていた。

出土遺物は、第73図214~219である。検出面で214・215・217・219が出土した。219は、台付甕の 胴部と脚部の接合部分である。ヘラ状工具による半月形の刺突文が施されている。218は、床面下よ り出土した鉢の口縁部と思われる。内外面と口唇部にヘラミガキが施されている。

SB69 (第38図)

E-3区に位置する。SB70を切り、SB72に切られている。SB72に東半部を切られているため規模は不明だが、形状は小判形と推定される。1 辺が2.6mと小さな住居跡である。貼床、炉は確認されなかった。柱穴も検出していない。

出土遺物は小片で、図示できるものはなかった。

SB72(第38・74図)

D、E-3区に位置する。SB69を切り、SB73・74に切られる。北東部分がいびつになるが、形状は隅丸長方形である。西側には、溝状の掘り込みをもっていた。強い貼床をもち、中央には周囲に白色粘土が巡る炉が認められた。柱穴はP2~5の3つを検出したが、南東部分では確認されなかった。

出土遺物は、第74図220~223である。220は、複合口縁の壷である。口縁部には羽状縄文を施した上に、円形貼付文を持つ。223は、床面下より出土した弥生時代中期嶺田様式の甕の口縁部である。

SB73(第38・74図)

D、E-3区に位置する。SB72を切る。SB74との関係は、A-A′の土層断面では不明であったが、B-B′ではSB74がSB73を切っていた。形状は小判形である。柱穴は、P7・9~11の

4本で、その内側に弱い貼床が認められた。中央から北よりに2段重なった皿状の炉が確認された。 出土遺物は、第74図224~226である。すべて床面から出土した。225は鉢である。P9東に完形で 正位の状態で出土した。口縁部は、ハケの後ヨコナデ調整されている。胴部は、細かいハケの後粗く 太いハケを、下半は細かいハケの後ヘラミガキされている。底には、木葉痕が残っていた。226は、 鍔状口縁高坏の脚部である。裾部の屈折がほとんどなくなっている。

以上のことから、この13軒の竪穴住居跡の時期を考えると、SB60の出土土器に最も古い様相がみられる。最も新しいものは、SB73出土の新段階の高坏脚部であるが、土層断面ではSB74が切っており、矛盾するところもある。床面の切り合いも考慮し、下図のような関係がわかった。

SB54
$$\rightarrow$$
 SB56 (新)
SB55
SB60 (古) \rightarrow SB59 (中)
SB63 \rightarrow SB64 \rightarrow SB72 \rightarrow SB73 \rightarrow ?SB74
SH06

古段階から新段階にかけて、建て替えを行っていることがわかる。

SB61 · 62

D、E-4区に2軒が切り合って存在した。

SB61 (第34·72図)

D-4区に位置する。SB62を切り、SH05に切られる。形状は小判形である。柱穴は、 $P1\sim4$ の 4本で、その内側に貼床が確認された。中央から北よりに炉は位置する。

出土遺物は、第72図190~193である。190は、折返し口縁の壷である。口唇部は、単斜方向の縄文を施した上に、7本で1単位の櫛刺突文を持つ。内面は、ハケの後単斜方向の縄文、その下方に櫛描扇形文が施されている。

SB62 (第34·72図)

E-4区に位置する。形状は、いびつな円形である。1辺が3.5mの小さな竪穴住居跡である。貼床は、認められなかった。焼土は中央から西よりに位置する。柱穴は、P2・3の2つを確認した。出土遺物は、第72図194~197である。194はP1に収まった状態で出土した。施文は胴部中位まで及んでいる。施文は上から8条の櫛描波状文、羽状縄文、その境に円形貼付文(6個で1単位が2、7個で1単位が2の4方向)、8条の櫛描波状文、9条の櫛描波状文である。胴部下半はヘラミガキ

されている。胴部内面は、ハケが施されている。

SB61・62ともに菊川様式の中段階といえる。

SB65 (第35・73図)

D-1区に単独で位置する。SH07に切られ、SH07の柱穴が位置する南東部は、張り出している。 形状は隅丸方形である。柱穴は $P1\sim4$ の4本で、その内側に貼床が認められた。炉は、中央から北よりに位置する。南側には、小さな焼土が2つ認められた。 出土遺物は、第73図198~204である。198は壷の頸部で、櫛押圧横線文の間に櫛刺突文が施されている。200も壷の頸部であるが、櫛押圧横線文5条の下に櫛刺突文が施されている。203は高坏で、坏部と脚部の接合部分である。形状は不明であるが、胎土から在地の鍔状口縁の高坏ではなく、西遠江からの搬入品といえる。SB65の時期は、菊川様式古段階といえる。

SB66 (第36・73図)

C、 $D-1\cdot 2$ 区に単独で位置する。形状は小判形である。北辺は、テラス状に内側に張り出し、 南辺は溝状の掘り込みをもつ。柱穴は $P1\sim 4$ の4本で、その内側に貼床が認められた。炉は中央か ら北よりに位置する。

出土遺物は、第73図205~211である。205は、単純口縁の壷である。口唇部に縄文が施され、端部は内外面に刻目を持つ。口縁部の内面には、単斜方向の縄文が施されている。206は、折返し口縁の壷である。単位は不明であるが、口唇部にヘラ状工具による刺突と刻目を交互に持つ。内面には、櫛描波状文、扇形文を施している。209は、平底の甕と考えられる。211は鍔状口縁高坏の脚部である。端部は面をもたず、ハの字に広がる。裾部の屈折は外側では認められるが、内側では外反だけとなっている。この高坏の脚部は菊川様式新段階のなかでも、新しい要素をもつといえる。

SB68·SB71 欠番

SB75 (第33・74図)

F-2区に位置する。南半部を検出した。北半部は調査区外へ及んでいる。形状は隅丸方形と推測される。貼床が認められ、調査区北壁で炉を検出した。柱穴は、南側の2つを確認した。

出土遺物は、第74図231~233であるが、弥生時代中期嶺田様式のものである。この竪穴住居跡の時期である弥生時代後期の遺物は、小片で図示できなかった。

SB76~79

F、G-2、3区に5軒が重なり合って位置する。

SB76・77 (第40・75図)

F、G-2・3区に位置する。SB76がSB77を切る。この2軒の住居跡は、SB78に切られる。2軒とも形状は、ややいびつな小判形である。SB76が内側の住居跡である。土層断面で東西の切り合いは確認できたが、南北では認められなかった。2軒とも4つの柱穴が確認でき、SB76はP1~4、SB77はP1・5~8である。SB76の柱穴内側に貼床が認められ、特に南東部に強い貼床が確認された。炉は、中央から離れた北東部に位置し、中央付近に小さな焼土が認められた。

出土遺物は、第75図234~244である。237・238はP9から出土した。238の壷底の上に、237の壷胴部片と長さ10cmの石がのった状態で出土した。239~242は、台付甕である。241・242は口唇部に刻目を持っていない。242と同一場所から出土した別個体の台付甕も刻目を持っていなかった。

SB76・77の時期は、菊川様式中段階といえる。

SB78 (第41·75図)

F、G-3区に位置する。SB76・77・79を切る。形状は小判形である。柱穴はP1~4の4本で、その内側に貼床が認められた。炉は中央からやや北よりに位置する。炉の西側には、長さ10cmの炭が出土している。

出土遺物は、第75図245~249である。247は複合口縁の壷である。口唇部に刻目を持ち、口縁部には羽状縄文が施されている。内面にはススが付着していた。246・248は床面から出土した。

SB79(第41・74図)

G-3区に位置する。SB78に切られる。形状は隅丸長方形である。貼床が認められた。炉はSB78によって切られている。柱穴は $P6\sim8$ であるが、南西部の柱穴は確認できなかった。

出土遺物は、第74図250・251である。

5軒の竪穴住居跡の関係は下図のようになる。

SB80 · 82 (第42 · 76図)

G-2区に2軒が重なり合っていた。SB80の形状は隅丸方形である。当初3軒の住居跡が重なり合っていると考えたが、切り合いも柱穴も十分に確認されなかったため、2軒分を考えSB81欠番とした。しかし、SB36との境にも掘り込みが認められ、別の住居跡が存在した可能性もある。北西部の一部分と東辺に撹乱を受けており、切り合い関係をさらに不明瞭にしていた。SB80は中央部に平坦部をもち、周囲は掘り込まれていた。炉は中央から北より、平坦部の肩に位置する。柱穴は、P1~4の4本である。その内側に弱い貼床が認められた。SB82は、形状も不明である。北側部分は調査区外へ及んでいる。柱穴は不明であった。

出土遺物は、第76図252~259である。256・257はSB80、255はSB82、他は2軒が重なる部分からの出土である。254は、壷の底部である。わずかに輪状となっている。木葉痕が残っていた。256の鉢の内側に257の台付甕が重なっていた。256の鉢は、口縁部が短く、わずかに外側に開く。口唇部には面を持つ。外面はハケの後、下半部がヨコミガキされている。内面は全面にヘラミガキが行われている。

SB84~87

S Z 01北東コーナーの I 、 J - 2 区に 4 軒の竪穴住居跡が位置する。すべての住居が S Z 01に切られていた。

SB84 (第43·76図)

SB87、SZ01に切られる。形状は隅丸方形である。中央に広い平坦面をもち、その周囲は掘り下げられている。平坦面の中央に炉は位置する。北辺部に壁溝が認められた。検出面で床面の一部が確認され、掘り方は浅い。柱穴はP1~3の3本であるが、北東部の柱穴はSZ01掘削の際、破壊されたようである。

出土遺物は、第76図260・261である。ともに鍔状口縁高坏の脚部である。260は坏部と脚部の接合

部である。櫛刺突羽状文が施されている。内面にはススが付着していた。261は、ハの字に開く脚端 部である。裾部外面は屈折しているが、内面はわずかに外反するだけである。この出土遺物は菊川様 式の最新段階の要素を持つが、SB87の出土遺物より新しく土層断面で確認したことと矛盾する。

SB85 (第44·76図)

SB87、SZ01に切られる。SB86との切り合い関係は不明である。住居の西辺一部を検出したのみで、形状、規模は不明である。その中心は調査区外北側へ及んでいる。貼床は確認されなかった。 炉は、2段に重なりP10の肩部に位置する。柱穴は、住居の方向が不明であるため、決定できなかった。

出土遺物は、第76図262~266である。SB86と重なり合う部分から出土している。262~264は、折返し口縁の壷である。262は、口唇部に棒状貼付文を6本単位で5又は6方向に持つ。貼付文の間には縄文が施されている。内面には単斜方向の縄文が施されている。

SB86 (第44・76図)

SB87、SZ01に切られる。SB85との切り合い関係は不明である。形状は隅丸方形である。北辺部は調査区外へ及んでいる。貼床は確認できなかった。柱穴は4本で、 $P1\sim 4$ である。中央から北よりに炉は位置するが、P6により北側半分は壊れていた。

出土遺物は、第76図262~265である。265はP12内から出土した。P12がSB86に伴うものであるか不明である。

SB87 (第43・76図)

SB84・85・86を切り、SZ01に切られる。形状は隅丸方形である。貼床は確認されなかった。柱穴は4本と考えられるが、検出したのはP5・6・8の3つである。SZ01が住居の中央を横断しているため、炉、柱穴はSΖ01掘削時に破壊されたと思われる。

出土遺物は、第76図267・268である。

2. 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は総数12棟分を確認した。掘立柱建物跡は調査区東半分に多く、内10棟がそこに存在していた。竪穴住居跡と重複するものは、ほとんどが竪穴住居跡を切っている。南北方向に棟をもつものが多く、その数は10棟分であった。また、柱間は、1間×1間が1、1間×2間が3、1間×3間が4、1間×4間が1、2間×2間が2棟分あった。

SH01 (第45図)

B-4区に位置し、SB38を切っている。梁行1間×桁行4間、規模3.1×4.5mで布掘りの溝をもつ建物である。北陸地方に多く類例がみられ、県内では磐田市匂坂中下4遺跡、浜松市天王中野遺跡で確認されている。。当遺跡では、SH01より大型の掘立柱建物が存在しており、また同規模、同主軸の建物が近接している。

出土遺物は小片で、図示できるものはなかった。

SH02(第46・77図)

C-4区に位置する。梁行1間×桁行3間、規模3.35×4.40mである。

出土遺物は、第77図269の台付甕である。P8より出土した。

SH03 (第47図)

 $C-2\cdot3$ 区に位置する。SB48を切り、SD01に切られる。梁行1間×桁行3間、規模3.6×5.9 5mとSH05同様、大きい。掘り方も長軸70~80cmと大きい。

遺物は小片で図示できるものはなかった。

SH04 (第48図)

B-1区に位置する。SB41を切っている。梁行 2 間×桁行 2 間、規模 3.45×5 mである。棟持ち柱と考えられる柱穴が存在したが、掘り方は小さく、浅い。唯一東西方向に棟をもっている。

図示できる遺物はなかった。

SH05 (第49図)

D-4区に位置する。SB61を切っている。梁行 1 間×桁行 3 間、規模 3.4×6 mである。P2 ・ $5\cdot7\cdot8$ には $10\sim20$ 大の石が含まれており、これは柱を支える根固めと考えられる。SH05 の北東に位置する SH03とは、ほぼ同規模で主軸も一致する。図示できる遺物はなかった。

SH06 (第45図)

E-4 区に位置する。SB70を切る。SB10との切り合い関係は不明である。梁行1間×桁行2間、規模 2.9×3.2 mである。図示できる出土遺物はなかった。

SH07 (第46図)

D-1区に位置する。SB65を切る。梁行1間×桁行1間、規模2.75×3.4mである。図示できる出土遺物はなかった。

SH08 (第23図)

B-2区に位置する。SB43の内側に位置しているが、SB43・44との切り合い関係は不明である。 梁行1間×桁行2間、規模3×3.35mである。図示できる出土遺物はなかった。

SH09 (第50図)

B-2・3区に位置する。SB45・46を切っている。東側梁部分は調査区外へ及んでいるため、梁行は不明、桁行2間であった。図示できる出土遺物はなかった。

SH10 (第48·77図)

B-3区に位置する。SB39・46・47との切り合い関係は不明である。梁行1間×桁行3間、規模 3.05×4.05 mである。出土遺物は、第77図270でP1から出土した古墳時代前期の高坏である。

SH11 (第50図)

調査区西半部のJ-3区に位置する。 $SB25 \cdot 27 \cdot 29$ との切り合い関係は不明である。梁行 1 間×桁行 2 間、規模 3.1×2.85 m である。図示できる出土遺物はなかった。

SH12 (第50図)

I-2区に位置する。SB85・86・87の上層から出土した。竪穴住居跡の上面には黒褐色の包含層が堆積しており、この層を掘りこんでいた。柱穴の覆土は灰褐色土である。竪穴住居検出面とSH12検出面との高低差は、10cmある。梁行2間×桁行2間、規模2.6×2.85mのほぼ正方形である。出土遺物はないが方形周溝墓、竪穴住居群とは時期が異なると考えられる。

以上のことから、東側の10棟はその規模、主軸から3つのグループに分けることができる。一つは大型の建物で、柱穴の掘り方も大きく、主軸を同じくするSH03と05の2棟分である。この2軒は近い位置にある。2つめは、同規模、同主軸で15m四方の中に位置するSH01・02・10の3棟で構成されるグループである。3つめは、規模はほぼ同じであるが、主軸が異なるもので、SH06・07・08の3棟で構成されるグループである。この3軒は離れた場所に点在している。掘立柱建物の年代は、柱穴からの出土遺物がわずかであるため、時期を確定することはできない。掘立柱建物は、集落により管理されていた倉庫と考えられることから、当然集落が営まれていた期間内にある。ただし竪穴住居跡との切り合い関係から、そのほとんどが菊川様式中段階以降新段階の時期と推測される。

3. 方形周溝墓(第15·51·78·79図)

調査区北西隅 $I-2\cdot 3$ 、 $J-1\sim 3$ 区に位置するが、西側半分は調査区外に及んでいる。 切り合い関係のある竪穴住居跡は、すべてこれに切られていた。この方形周溝墓は、周囲の状況から単独 1 基で存在すると考えられる。規模は溝の内側で 1 辺15.5 m、溝幅1.5 ~ 2 mである。溝は全周すると推測されるが、検出した 2 つのコーナーは幅 1 mと狭まっていた。主体部は、確認されなかった。

出土遺物は、第78・79図の271~296である。その多くは、1層の黒褐色土からの出土である。南溝からの出土が271・286、北溝からの出土が274・277・278・282・285・289~292・296、それ以外は東溝からの出土である。272は、内湾する単純口縁の小型壷である。口縁部は、タテハケの後ヨコナデが施されている。頸部から胴部上半には櫛刺突羽状文を、その下方に櫛押圧横線文を施している。胴部下半は、ハケの後ヘラミガキが行われている。口縁部内面にはヨコナデが施されている。底部は、焼成後に穿孔が施されている。273は、壷の肩部で有段羽状文がみられる。274は壷の口縁部である。口縁部は強く屈曲し、その部分には凸帯を持つ。この凸帯には刻目が入れられている。これは胎土も他と異なり、西遠江からの搬入品であるといえる。277は、直線的に開く鉢の口縁部と思われる。口唇部は、ハケにより面取りされている。外面はヨコハケの後ヘラ状工具により縦に沈線が施されている。内面は、ハケまたは無節の縄文が施されている。281は、大型の壷の胴部である。溝の肩部とSB28内の土器片と接合された。

284は、台付甕である。溝の肩部と溝内より出土した土器片と接合できた。口唇部の刻目は大小のばらつきがある。口縁部には、わずかであるが丹塗りが施されていた。287は小型鉢である。口縁部は折返されている。外面全面はヨコミガキが行われている。胎土・色調から西遠江からの搬入品といえる。

288は鍔状口縁高坏の脚部である。坏部と脚部の接合部分には、わずかに段が残り櫛刺突羽状文が施されている。裾部は、ハの字に大きく開き、粗いハケが施されている。292は、深い坏部をもつ高坏片である。胎土・色調から西遠江からの搬入品といえる。

おもな出土遺物について述べてきたが、古い様相をもつ土器も若干含まれているが、方形周溝墓は、 菊川様式新段階の時期の築造といえる。竪穴住居跡との時期差は、ほとんどなく住居跡が廃絶されて すぐに造られたと推定される。また、272・284は、明らかに供献土器である。これらの土器は、方台部に置かれたものが溝の埋没する際に転落したものといえる。

4. 溝

SD01(第3·59·77図)

 $C-1\sim6$ 区の調査区東半部を南北に縦断する溝である。蛇行することなく、座標の南北とほぼ一致している。幅1.7m,深さ0.3mを測る。第59図の調査区周辺全体図をみると、以前行われた北側の調査地点でSD01につながると考えられる南北に走る溝が存在している。切り合い関係のある竪穴住居群を切っていることも共通している。検出した長さが約180mにも及ぶ溝は、どういう意図で掘削されたかは不明である。

出土遺物は、第77図297~392である。301は高坏脚部、302は器台の脚部である。菊川様式新段階の住居を切っているため、それ以降に掘削されたといえる。明確な時期は不明である。

SD02 (第3図)

調査区南側のE、F、G-6区を東西方向に走っている。幅1.5m,深さ0.1mで、検出した長さは23mである。SB $03\cdot11$ を切っている。出土遺物は小片で図示できるものはなかった。

5. 土坑

SK01 (第52·77図)

F、G-4区に位置する。SB13との切り合い関係は不明である。形状はいびつである。深さは 7 cmと浅い。

出土遺物は、第77図303~310である。304・305は同一個体の壷片である。胴部下半まで羽状縄文を施している。肩部には円形貼付文を付す。308・309は鍔状口縁高坏である。308は、口縁部をほぼ水平に開き、口唇部の上端と下端に刻目を持つ。坏部は直線的に開き、深い。口縁部と坏部の接合部には、明瞭に粘土紐の接合痕が残っていた。そこには、櫛刺突羽状文が施されている。309は、口縁部が外反し開いている。出土した土器からSK01の時期は、菊川様式古段階といえる。

SK02 (第52・80図)

F-4区S K01の北東に位置する。規模は 2.25×2.05 m、深さ0.45 m の隅丸方形である。南側が一段深く掘りこまれていた。

出土遺物は、第80図311~321であり、ほとんどの土器が検出面から出土した。311は単純口縁の壷である。口唇部はハケで面取りされ、端部内外面に刻目を持つ。312は、口唇部を折返す内湾口縁の壷である。内面には縄文が施されている。315は小型の鉢である。口縁部は短く直線的に開き、胴部下半は強く屈曲している。316~318は、台付甕である。316・317の口縁部はゆるやかに屈曲しているが、318のそれは、くの字に折れている。319~321は、鍔状口縁高坏である。319は、口縁部を水平に開き、坏部は丸みを帯び碗型に近い。口唇部は、上下端に刻目を持つ。内外面にヘラミガキが行われている。また、内面にはススが付着していた。321は、坏部と脚部の接合部分である。粘土帯をもち、そこに櫛刺突羽状文が施されている。SK02の時期は、出土土器から菊川様式中段階といえる。

SK03 (第53·81図)

調査区西半部の竪穴住居群より南へ数m離れた $I-3\cdot 4$ 区に位置する。形状は不整形で、長軸 $3.95\,\mathrm{m}$ 、短軸 $2.6\,\mathrm{m}$ 、深さ $0.3\,\mathrm{m}$ の規模である。2つの土坑が切り合っているとも考えられる。土器が 多量に出土し、南側には $0.6\,\mathrm{m}\times 0.3\,\mathrm{m}$ 、厚さ $0.1\,\mathrm{m}$ の焼土があった。土器は焼土の上にも乗っていた。 また、拳大の礫も含まれていた。

出土土器は、第81図322~335である。出土量に対し実測可能な土器は少量であった。322は、折返し口縁の壷である。口唇部には縄文、折返し部分には櫛刺突文、内面には単斜方向の縄文が施され、その上に円形貼付文を持つ。324は壷の胴部片である。施文は上からヘラミガキ、櫛描簾状文、波状文、扇形文である。329は大型の鉢と思われる。折返し口縁で、口唇部はハケで面取りされ、刻目を持つ。口縁部は、くの字に屈曲している。331~334は台付甕である。335は高坏である。坏部と脚部の接合部分に櫛描直線文が施されている。その形状・胎土・色調から西遠江からの搬入品といえる。SK03の時期は、出土土器から菊川様式中段階といえる。

SK04 欠番

SK05 (第55·80図)

D-4区、SH05東側に位置する。長軸2.20m、短軸1.9m、深さ0.13mの規模である。

出土遺物は、第80図336~340である。336は、複合口縁の壷である。口縁部は明確に屈折している。337は壷の肩部である。3条の櫛押圧横線文の下に櫛刺突羽状文が施されている。338~340は台付甕である。

SK06 (第55図)

B-3区、SB47南側に位置する。長軸2.05m。短軸1.65m、深さ0.14mの規模である。遺物は小片で図示できるものはなかった。

SK07(第54・82図)

H-2区に位置する。長軸1.55m、短軸1.10m、深さ0.16mの規模である。北西部は、小穴と切り合っている。

出土遺物は、第82図341~348であるが、検出面より高い位置で出土した。341は、大型の折返し口縁の壷である。口唇部に刻目を持つ。頸部は、タテハケの後タテミガキされている。肩部には口唇部と同様の工具で刻みが入れられている。342は壷の上部である。施文は上から、1条の櫛押圧横線文、3条の櫛描簾状文、波状文、扇形文が施されている。347・348は鍔状口縁高坏である。348は坏部と脚部の接合部分で、櫛刺突羽状文の下に1条の櫛押圧横線文が施されている。これらの出土土器からSK07の時期は、菊川様式中段階といえる。

SK08(第54·83図)

H-2区のSK07から南西 2 mほど離れた場所に位置する。長軸1.6m、短軸1.35m、深さ0.38mの規模である。土器と共に数点の礫が混じっていた。

出土遺物は、第83図349~366で、検出面から0.2mの深さで多くの土器が出土した。349~351は壷である。349は、単純口縁の壷である。口縁部は逆ハの字形に大きく開き、口唇部は丸く仕上げられ

ている。頸部はくの字に屈曲し、胴部は球形に近い。この形状から西遠江の影響を受けていると考えられる。350は折返し口縁の壷で、口唇部、肩部、口縁部内面に単斜方向の縄文が施されている。351は、頸部から肩部にかけて櫛描簾状文が押圧横線文が判断のできない文様の下に、単斜方向の縄文が施されている。352・353は無頸の鉢である。352は、口縁部に5単位8方向の貼付文を2段持っている。胴部は粗い一次ハケの後、細かい二次ハケが施され、ヘラミガキが行われている。353は、口縁部に縄文が施されている。354~357は台付甕の上部、358~362は、台付甕脚部である。363~366は、鍔状口縁高坏である。坏部と脚部の接合部に、365は粘土帯を持ち、そこに櫛刺突羽状文が施されている。366は、脚部に7条の櫛押圧横線文が施されている。これらの出土遺物よりSK08の時期は、菊川様式中段階といえる。

SK09 (第54·82·84·85図)

S K07・08と同様にH-2 区に位置する。長軸2.8m、短軸1.9m、深さ0.44mの規模である。北東部分は他の遺構と切り合っていた。

出土遺物は、第82・84・85図の367~399である。多量の土器が出土したが、そのほとんどの土器は検出面から0.2mの深さにかけて出土した。また、土器に混じって0.2mの炭が出土した。367は、単純口縁の壷である。口縁部は逆ハの字に開き、口唇部は丸く仕上げられている。口縁部内面には櫛描扇形文を施している。368は折返し口縁の壷であるが、口縁の形状は367とほぼ同一で、口唇部を折返しているか否かの違いである。口唇部は面を持ち、刻目がある。口縁部内面には、ヘラ状工具によったが流されている。頸部にかけてはヘラミガキを行っている。口縁部内面には、ヘラ状工具による放射状の施文の下に無節の羽状縄文を施している。369は、肩部の櫛描波状文の下に、縄文が施されている。371・372は複合口縁の壷である。371は、SB28から出土した土器片と接合された。口縁部は無節の縄文が山形に施されている。肩部から胴部にかけては、沈線の下に櫛刺突羽状文、6方向の円形貼付文、無節の羽状縄文が施されている。372は口唇部を丸く仕上げられ、口縁部は内外面共に、工具によってナデ調整されている。鍔状口縁高坏の脚部とも考えられたが、口径が大きすぎるため複合口縁の壷とした。373は、大型の単純口縁の壷である。口唇部は面を持ち、口縁部は逆ハの字に開く。口縁部から頸部、胴部はハケ調整されている。肩部はわずかに段をもち、櫛刺突羽状文が施されている。口縁部内面には、櫛描波状文、扇形文が施されている。381~384は小型壷である。381・383は、肩部に櫛刺突羽状文が施されている。

385~392は台付甕である。393~399は高坏である。393は碗型の坏部で、内外面のヘラミガキが行われている部分には、丹塗りが認められた。形状、胎土から西遠江からの搬入品といえる。同様に394・395も胎土・色調が他と異なり、西遠江からの搬入品といえる。394は外面にススが付着し、395は坏部に丹塗りが施されていた。396~399は、鍔状口縁高坏の脚部である。396・397は坏部と脚部の接合部分に粘土帯をもち、そこに櫛刺突羽状文が施されている。399は、ハの字に開く脚裾部である。

これらの出土土器から、SK09の時期は菊川様式中段階といえる。

SK10 (第55·85図)

F-4区、SB01北西に位置する。長軸 2 m、短軸1.6m、深さ0.19mである。0.46m×0.2m、厚さ0.05mの焼土が、南側の掘り方近くで認められた。出土遺物は、第85図400の高坏脚部である。

各土坑について述べてきたが、SK02・03・07・08・09からは多量の土器が出土している。これら

の土坑は竪穴住居群から少し離れた地点に位置していた。SK09出土の土器がSB28出土土器と接合されたことから、竪穴住居建て替えの際に土器が廃棄された穴と考えられる。

6. 小穴

約2,500もの小穴が確認されたが、ここでは図示可能であった出土遺物を伴う小穴について取り上げる。

C-5区SP125·126(第56·86図)

SP125・126に伴うというより、検出面から15cm上で土器は出土した。出土土器は、第86図401~407である。401は、折返し口縁の壷である。口唇部に単斜方向の縄文、刻目を施している。口縁部内面には単斜方向の縄文を施した上に、櫛描扇形文が施されている。402は壷の胴部である。施文は上からヨコヘラミガキ、櫛刺突羽状文、櫛刺突文付凸帯、羽状縄文と文様は胴部下半にまで及ぶ。404~406は台付甕である。407は高坏である。碗型の坏部で、脚部は短く台形状である。坏部と脚部の境には櫛刺突羽状文が施されている。

F-4区SP01(第56·86図)

0.5×0.4mの大きさで、深さ0.27mの小穴内から、第86図412のほぼ完形の鉢が出土した。口唇部は面取りされ、口縁部は短く垂直に立ち上がり、タテハケの後ヨコナデ調整されている。胴部上半はハケ、下半はヘラミガキが施され、内面は全面ハケの後ヘラミガキが行われている。

F-4区SP88 (第56·86図)

1.5×0.6mの大きさで、深さ0.12mの細長い小穴から、土器と礫が混在して出土した。礫の上に土器が乗るような状態で出土している。出土遺物は、第86図408~411である。408は、単純口縁の壷である。口縁部はわずかに内湾し、口唇部は面を持つ。

以下遺物を中心に述べていく。

413は、G-5区SP38から出土した鉢である。口縁部は、台付甕口縁部のようにくの字に屈曲し、口唇部は丸く仕上げ刻目を持つ。胴部はハケの後へラミガキされている。414は、H-2区SP26から出土した単純口縁の壷である。口縁部は逆ハの字に大きく開き、ハケの後ヨコナデ調整されている。口唇部は丸く仕上げられている。頸部は、くの字に屈曲する。胴部は球胴形に近く、ハケ調整されている。416・417は、B-1区SP75から出土した。416は、複合口縁の壷である。口縁部に棒状貼付文を持つ。419は、C-3区SP28から出土した折返し口縁の壷である。口縁部は大きく開くことなく、直線的に開き折返し部が長い。口唇部には櫛刺突文を交差させている。内面にはヘラミガキを施している。420は、C-5区SP25から出土した鍔状口縁高坏の脚部である。坏部と脚部の境に有段櫛刺突羽状文を2段施す。421は、D-1区SP57から出土した台付甕の脚部である。短脚で小型であり、弥生時代中期白岩様式の台付甕脚部と考えられる。422は、D-5区SP09から出土した大型の折返し口縁の壷である。大きく外反し、折返し部は肥厚し、断面は長方形である。口唇部にはヘラ状工具による刺突文が入れられ、折返し部下方には指頭圧痕が残る。423は、E-1区SP25から出土した折返し口縁の壷である。口唇部にはヘラ状工具による棒状刺突文が入れられている。口縁部内面には、ハケの後羽状縄文を施し、円形貼付文を付す。425は、E-2区SP03から出土した鍔状口縁の高坏脚部である。坏部と脚部の接合部分は、わずかに有段で櫛刺突羽状文が2段施されている。

また上段の羽状文の上には、円形貼付文を持つ。坏部底には焼成前に穿孔が施されている。祭祀に使用されたことが窺える。426は、E-3区S P14から出土した鍔状口縁の高坏脚部である。坏部と脚部の接合部に段を持たず、櫛刺突羽状文が施されている。427は、F-2区S P37から出土した折返し口縁の壷である。肩部に1条の沈線を持ち、その下方に櫛刺突羽状文、結節縄文を施している。口縁部内面にも結節縄文が施されている。

430は、H-4 区 S P 51から出土した複合口縁の壷である。口縁部には、羽状縄文を施した上に中央に刺突された棒状貼付文を付している。口唇部には縄文を施し、内外面には刻目を持つ。口縁部内面には櫛描波状文が施されている。第90図 496は、B-3 区 S P 24から出土した。直径 6 cm 前後の球形をしたもので、表面全体がツルツルに仕上げられている。これは、使用した結果研磨されたような状態になったのか、それとも当初から研磨してそうなったのかわからない。石材は泥岩で、重さは24 8 g を量る。この石と共に418の台付甕の上部が出土している。

第1表 竪穴住居跡一覧表

童		北よりに平坦部有り。		中央に平坦部有り。		南側に壁溝。	2面の貼床をもつ。建て替え有り。	中央に平坦部有り。			中央に平坦部有り。西側に壁溝有り。	中央に平坦部有り。東西、南側に壁溝有り。2面の貼床。焼失家屋か。	中央に平坦部有り。			中央部が掘り込まれている。	中央に平坦部有り。			ı	中央に平坦部有り。				中央に平坦部有り。	中央に平坦部有り。	北側が溝状掘り込まれている。		66~68はSB26、27の重なる部分からの出土。				
遺物番号	$1 \sim 4$	2~2	8, 9	10~13	14, 15		16	17, 18	19			20~23	24			25~27	28~31	32~36	37, 38	39	40, 41	42, 43	44~46	47~49	50~58	59~65	63		64, 65	69~71	72~90	$91 \sim 93$	94~96
及	炉1 焼土2	炉1	炉1		炉1		炉2				炉1	炉2				炉1	焼土1(南東)	焼土1(南東)	炉1	炉1	炉1				加1	为1			炉1		炉1	炉1	
貼床	0	0	0	0	0		0	0	0			0	0		0	0	0	0	0	0	0		0		0	0			0		0	0	
柱穴 貼床	4	2	3	3	2	4	4	2	4		4		4	4		4	4	4	3	4		က			က	-	က	2	က	2	3	1	
床面積(m²)	20.8	8.1	11.5					(12.0)			(13.9)	16.1	13.5	19.4		9.5	11.5	17.9	20.2	24.3	13.7				(24.3)	11.1					21.8	12.7	
規模 東西×南北(m)	4.25×4.90	3.45×3.05	$(3.15) \times 3.65$	$\times 4.20$				(3.80×3.15)			(3.30×4.20)	4.30×3.75	3.50×3.85	4.05×4.80		3.75×3.20	3.20×3.60	3.90×4.60	$5.05 \times (4.0)$	$(5.40) \times 4.05$	$3.50 \times (3.90)$				(5.40×4.50)	$(3.48) \times 3.18$	×3.35	4.68×	×3.00	4.60×	5.52×3.95	3.30×3.85	
土	N16° W	N14° E	N18° E	N10° E		N13° W	N 6° W	N 3 ° W	N 2 ° W		N 5° E	N 7° W	N 58° W	N 58° W		N 7° E	N10° E	N 8 ° W	N3° E	N 3 ° W	N 0 ° W				N1°E	N 0 ° W	N 3° W	N10° E	N 4° W	N10° E	N1°W	N28° W	
形		227							٥.		٠.					251																	
画	小判形	いびつな円形	隅丸方形	小判形	不明	不明	不明	隅丸長方形	隅丸長方形	不明	隅丸長方形	小判形	小判形	小判形	不明	いびつな円形	隅丸方形	小判形	隅丸長方形	隅丸長方形	隅丸方形	不明	隅丸方形?	不明	小判形	隅丸方形	隅丸方形	不明	方形	隅丸長方形	隅丸長方形	小判形	小判形?
1×1																																	
和	E,F-4,5	D, E-5	E-5	D-5	D-5	D,E-5	D,E-5	E-5	D, E-4,5	D, E-4,5	E-4,5	E-4	F-5	F-5	D-5	G-4	H-4	H-3,4	G,H-3,4	G,H-3	H-3	H-3,4	J-4	J-3	J-3	I, J-3	I-3	I, J-3	I-2,3	I, J-2,3	I, J-2,3	J-2,3	J-2,3
遺構番号	SB01	SB02	SB03	SB04	SB05	SB06A	SB06B	SB07	SB08A	SB08B	SB09	SB10	SB11A	SB11B	SB12	SB13	SB14	SB15	SB16	SB17	SB18	SB19	SB20	SB21	SB22	SB23	SB24	SB25	SB26	SB27	SB28	SB29	SB30

15°) h	5.52×6.42	35.4	4	0	加2	$97 \sim 105$	周囲が溝状に掘り込まれている。
	<u> </u>	$3.25 \times (2.76)$	8.3			焼土1		- 1
	>	$(5.10) \times 5.45$	27.8	4	0	炉1	106~120	北辺、東辺が溝状に掘り込まれている
10° W	>	$(5.40) \times 6.10$	32.9	4	0	炉1	$121 \sim 127$	中央に平坦部有り。
		×5.2		4	0	焼土1		中央に平坦部有り。
16° E	(-)	5.85×5.95	34.8	4	0	焼土1	128~132	
						炉1		
10° E		4.30×3.40	14.6		0	炉1	$133 \sim 135$	
e° E	(-)	5.00×4.15	20.8	4	0	焼土2	136	
	(-)	×4.5		4		炉2、焼土2	$137 \sim 144$	中央に平坦部有り。
	Λ	$(3.9) \times 3.54$	13.8	4		焼土2		
				П				
							145, 146	
汩	(-)	5.75×4.55	26.2	4		炉1		南側が溝状に掘り込まれている。
Ħ	(-)	5.75×5.85	26.9	4	0	炉2	$147 \sim 150$	
田	(-)	$(5.4) \times 4.8$	25.9	4	0	炉2	$151 \sim 153$	北側に壁溝有り。
田	(-)	×4.4			0	炉1		北側に壁溝有り。
田	(-)			2	0	炉1		中央に平坦部有り。
田	(-)	5.25×4.55	23.9	4	0	炉2	154, 155	北辺、東辺が溝状に掘り込まれている
ы	(-)	5.50×4.40	24.2		0	炉3、焼土3	$160 \sim 166$	建て替え有り。
ম	(-)	4.00×3.80	15.2	4	0	炉1	$156 \sim 159$	
\bowtie	>	5.80×5.40	24.6	3			$167 \sim 169$	
M	>			4	0	焼土1	$170 \sim 173$	貼床2面。
W	Δ			2	0	炉1	$174 \sim 176$	
					0	焼土1		
					0		177	
				4	0			
э Э	(-)	$(6.90) \times 5.55$	37.6	4	0	炉1、焼土2	178~182	
3° W	N.	4.55×5.85	26.6	က	0	炉1、焼土4	183~187	
M 。	Δ	(3.60×4.50)	16.2	4		焼土1	188, 189	
0	Λ	4.10×4.90	20.1	4	0	炉1、焼土1	$190 \sim 193$	
0	-							
(1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1)				W (5.10)×5.45 W (5.10)×5.45 W (5.10)×5.45 W (5.40)×6.10 ×5.2 E 5.85×5.95 E 5.00×4.15 E 5.00×4.15 E 5.75×4.55 E 5.75×4.8 E 5.75×4.8 E 5.75×4.8 E 5.75×4.8 E 5.75×4.8 E 6.40×3.80 W (3.9)×3.54 W (3.9)×3.54 E 5.25×4.65 E 6.20×5.40 W 5.80×5.40 W 7.80×5.40 W 7.80×	W (5.10)×5.45 5.7.8 W (5.10)×5.45 27.8 W (5.10)×5.45 27.8 W (5.10)×5.45 27.8 W (5.40)×6.10 32.9 E 5.85×5.95 34.8 E 4.30×3.40 14.6 E 5.00×4.15 20.8 E 5.75×4.55 26.9 E 5.75×4.55 26.9 E 6.40×3.80 15.2 W 5.80×5.40 24.6 W 5.80×5.40 24.6 W 6.900×5.55 37.6 E (6.90)×5.55 37.6 W 4.55×5.85 26.6 W 4.55×5.85 26.9 W 4.55×6.85 23.9 W 4.55×6.85 26.9 W 7.80×6.40 24.6 W 8.80×6.40 24.6 W 9.80×6.40 24.6 W 9.80×6.40 24.6 W 1.50×6.40 20.1	W (5.10)×5.45 5.78 4 W (5.10)×5.45 27.8 4 W (5.10)×6.10 32.9 4 X ×5.2 4 E 5.85×5.95 34.8 4 E 5.00×4.15 20.8 4 E ×4.5 4.5 44 E 5.75×4.55 26.9 4 E 5.75×4.55 26.9 4 E 5.75×4.55 26.9 4 E 5.75×4.5 40 24.2 E 6.4)×4.4 24.4 E 6.50×4.40 24.6 3 W 5.80×5.40 24.6 3 W 5.80×5.40 24.6 3 W 4.55×5.85 26.9 4 E 6.90)×5.55 37.6 4 E 7.00×3.80 15.2 4 W 7.00×5.55 37.6 4 E 6.90)×5.55 37.6 4 E (6.90)×5.55 37.6 4 W 4.15×5.85 26.6 3 W 4.10×4.90 20.1 4		

			南辺が溝状に掘り込まれている。	炉は2段に重なる。			壁際を溝状に掘り込む。		西辺が溝状の掘り込まれている。	炉は2段に重なる。							252~254、258、259は、SB80、82の重なる部分から出土				周囲を掘り込む。北辺に壁溝をもつ。	炉は2段に重なる。	262~266はSB85、86の重なる部分から出土。	
		$198 \sim 204$	$205 \sim 211$	212, 213	-		$214 \sim 219$		$220 \sim 223$	$224 \sim 226$	$227 \sim 230$	$231 \sim 233$	$234 \sim 244$		245~249	250, 251	256, 257		255		260, 261		292	267, 268
炉1	炉1	炉1、焼土2	炉1	炉2			炉1		炉1	炉2	炉1	炉1	炉1、焼土1		炉1	炉1	炉1				炉1	炉2	炉1	
		0	0	0					0	0	0	0	0		0	0	0			0	0			
4	4	4	4	4			4		3	4	4	2	4	4	4	က	4			2	3		4	က
	25	29.3	29.6	23.5			29.1		42	20.5	36		31.2	39.9	25.1		31							20
5.04×	$(5.0) \times 5.0$	4.85×6.05	4.85×6.10	5.05×4.65		×2.70	4.85×6.00		$(8.40) \times 5.00$	$(4.5) \times 5.05$	$(6.48) \times 5.55$	5.20×	5.20×6.0	5.7×7.0	5.35×4.70	3.40×	$(5.0) \times 6.2$			×3.0	×3.9			"4,60×4.35"
N 6° W	N15° E	N42° W	N39° W	N21° E			N14° W		N16° E	N19° E	N8° E	N14° E	N14° E	N15° E	N14° W	N 7° E	N1° E				N15° W		N15° W	N12° W
不明	隅丸方形	隅丸長方形	小判形	隅丸方形		小判形	小判形		隅丸長方形	小判形	隅丸方形	隅丸方形	小判形	小判形	小判形	隅丸長方形	隅丸方形		不明	円形?	隅丸方形	不明	隅丸方形	隅丸方形
D-3	D-2,3	D-1	C,D-1,2	E-2,3	欠番	E-3	E-3,4	久番	D,E-3	D,E-3	D-3	F-2	F,G-2,3	F,G-2,3	F,G-3	G-3	G-2	欠番	G-2	G-3	I,J-2	1-1,2	I-1,2	I-2
SB63	SB64	SB65	SB66	SB67	SB68	SB69	SB70	SB71	SB72	SB73	SB74	SB75	SB76	SB77	SB78	SB79	SB80	SB81	SB82	SB83	SB84	SB85	SB86	SB87

第2表 掘立柱建物一覧表

番号	地区	梁 間 × 桁行(間)	規 模 (m)	面積 (m²)	主 軸	備 考
S H 0 1	B - 4	1×4	3.10×4.50	14	N15° E	
S H 0 2	C - 4	1 × 3	3.35×4.40	14.7	N11°E	出土遺物269。
S H 0 3	C - 2, 3	1 × 3	3.60×5.95	21.4	N2° W	S B 48を切る。
S H 0 4	B - 1	2×2	3.45×5.00	17.3	N8° E	
S H 0 5	D - 4	1×3	3.40×6.00	20.4	N2° W	S B 61を切る。
S H 0 6	E-4	1×2	2.90×3.20	9.3	N24° E	SB70を切る。
S H 0 7	D - 1	1 × 1	2.75×3.40	9.4	N16° W	SB65を切る。
SH08	B-2	1×2	3.00×3.35	10.1	N5° E	
SH09	B - 2, 3	(1×2)	×4.05		N1°W	S B 45を切る。
S H 1 0	B - 3	1×3	3.05×4.05	12.4	N15° E	出土遺物270。
S H 1 1	J - 3	1×2	3.10×2.85	8.8	N9°E	
S H 1 2	I - 2	2×2	2.85×2.60	7.4	N6°E	

第 3 表 土坑一覧表

遺構番号	地 区	規模(m)	深 さ (m)	遺物場番号
S K 0 1	F, G-4	×1.65	0.07	303~310
S K 0 2	F-4	2.25×2.05	0.45	311~321
S K 0 3	I - 3, 4	3.95×2.60	0.30	322~335
S K 0 4	欠番			
S K 0 5	D - 4	2.20×1.90	0.13	336~340
S K 0 6	B - 3	1.65×2.05	0.14	,
S K 0 7	H - 2	1.10×1.55	0.16	341~348
S K 0 8	H - 2	1.60×1.35	0.38	349~366
S K 0 9	H - 2	2.80×1.90	0.44	367~399
S K 1 0	F-4	2.00×1.60	0.19	400

第 4 表 小 穴 一 覧 表

遺構番号	地 区	規模(m)	深 さ (m)	遺物場番号
S P 7 5	B-1	1.05×1.75	0.44	416,417
S P 2 4	B - 3	0.90×0.80	0.16	418、496
S P 2 8	C - 3	×0.30	0.09	419
S P 2 5	C - 5	0.45×0.35	0.49	420
S P 5 7	D - 1	0.85×0.40	0.24	421
S P 0 9	D - 5	0.30×0.35	0.45	422
S P 2 5	E - 1	0.52×0.52	0.21	423
S P 0 2	E-2	0.65×0.60	0.15	424
S P 0 3	E-2	0.50×0.35	0.29	425
S P 1 4	E - 3	1.10×0.85	0.20	. 426
S P 3 7	F-2	0.60×0.55	0.28	427
S P 0 1	F-4	0.40×0.50	0.27	412
S P 8 8	F-4	1.50×0.60	0.12	408~411
S P 0 1	G - 4	0.25×0.20	0.24	428
S P 3 8	G — 5	0.55×0.70	0.25	413
S P 2 6	H - 2	0.40×0.35	0.29	414
S P 5 3	H - 2	0.40×0.35	0.38	415
S P 5 1	H - 4	$(0.35) \times 0.50$	0.27	430
S P 0 2	H — 5	0.30×0.35	0.26	429
S P 5 0	I — 5	0.60×0.44	0.30	431

第2節 縄文時代・旧石器時代

調査では、縄文時代中期後半の結節縄文を施した土器を中心に出土した。また、遺構外からも多くの土器片が出土した。それらについて順次述べていくことにする。

1. 小 穴

B-3区SP32(第58·88図)

長径1.5m、短径1.4m、深さ0.36mのいびつな円形の小穴に、さらに2つの小穴が掘りこまれていた。出土遺物は、第88図432の土器である。432は、小穴に対し正位な状態で出土したもので、深鉢形土器の口縁部の無い埋甕の可能性のある土器である。土器は、胴部から底部までの部位で、文様は縦方向に沈線による楕円区画が二段描出されており、その区画文の中には磨り消された結節縄文が二条確認できる。

J 1 (第58·88図)

D-4区に位置する。長径0.9m、短径0.7m、深さ0.03mから第88図433の土器が出土した。坑の底面に対し正位な状態で出土しており、深鉢形土器の胴下部を埋設した埋甕の可能性のある土器である。出土した土器は胴下半から底部に至るのもので、器面は無文、器厚が厚く重量感のある土器である。

J2 (第58・88図)

C-3・4区に位置する。SB55、SD01に切られる。形状は不明である。出土遺物は、第88図434・435の土器である。434は、大粒の砂粒を含む黄褐色の深鉢形土器の胴下半部で、器厚がやや薄手であるという特徴をもつ。竹管状工具の外皮面使用による縦位の沈線区画と、その内側に波状の懸垂文が描き出されている。435は、434と直接接合しないが同一個体の底部破片である。

J3 (第58・88図)

C-3区に位置する。SH03柱穴に切られ形状は不明である。出土遺物は、第88図436の土器である。同時期の他の土器に比べかなり薄く仕上げられており、また胎土に含まれるものもあまりないことから縄文時代中期とは違った時期の土器にも見える土器である。器面は無文で、出土状態から埋甕の可能性のあるものである。

F-5区SP62(第57·88図)

長径0.5m、短径0.4m、深さ0.15mの小穴である。出土遺物は、第88図437の土器である。深鉢形土器の底部破片で、器厚が厚く、重量感のある土器である。器面には、胴下半部から懸垂した沈線を僅かであるが確認することができる。

G-4区SP11 (第88図)

G-4 に位置した S P 11から出土した遺物は、第88図438の土器である。深鉢形土器の底部破片で、器厚が厚く、重量感のある土器である。器面には、胴下半部から懸垂した沈線を確認することができる。

E-5区SP44(第57·88図)

長径0.4m、短径0.35m、深さ0.25mの小穴である。出土遺物は、第88図439・440の土器である。両者は直接接合しないが同一個体で、深鉢形土器の胴部破片である。器面の文様は隆帯による区画文が施され、その内側に浅い平行沈線が充填されたものである。何れにしても器厚の厚い、重量感のある土器である。

F-2区SP32(第57·88図)

直径0.3m、深さ0.11mの小穴である。出土遺物は、第88図441の土器である。土器は無文の口縁部破片で、内側に強く内湾する形状の深鉢形土器と思われる。器厚が厚く、重量感のある土器である。

F-4区SP49 (第88図)

長径0.28m、短径0.26m、深さ0.06mの小穴である。出土遺物は、第88図442の土器である。深鉢形土器の胴下半部の破片であるが、同時期の他の土器に比べかなり薄く仕上げられており、また胎土に含まれるものもあまりないことから縄文時代中期とは違った時期の土器にも見える土器である。器面は無文の土器で、SP50出土の443と同一個体であると思われる。

F-4区SP50(第88図)

長径0.28m、短径0.24m、深さ0.12mの小穴である。出土遺物は、第88図443の土器である。深鉢形土器の胴下半部の破片であるが、同時期の他の土器に比べかなり薄く仕上げられており、また胎土に含まれるものもあまりないことから縄文時代中期とは違った時期の土器にも見える土器である。器面は無文の土器で、SP49出土の442と同一個体であると思われる。

C-3区SP25 (第58図)

長径1.35m、短径0.7mの楕円形に浅く掘りこまれた中に、直径0.6m、深さ0.56mの小穴が掘りこまれていた。この中に長さ0.48m、太さ0.13mの自然石が立ったような状態で出土した。底から0.2m ほど浮いていた。石には何の加工も施されていない。出土土器はなかった。この遺構の性格は不明である。

2. そ の 他 (第88~90図)

遺構以外から出土した遺物に土器と石器がある。土器はすべて破片で444~495がそれに該当し、第88、89図に示した。石器は497~504で、それらを第90図に示した。それぞれの遺物の特徴からこれらの遺物が属する時期は、土器のほとんどが中期後葉期、石器の497~501が同中期後葉期、502~504が旧石器(先土器)時代のものに比定できると考える。以下、個々に説明を加えると、

まず土器であるが、444~448は深鉢形土器の口縁部破片で、無文のものを集めた。444は、内側に強く内湾する形状の深鉢形土器である。器厚が厚く、重量感のある土器である。445は口唇部が平坦を成すもので、446と448は単純口縁の形状をとるものである。447は口唇部直下に浅い沈線が巡り、山形の波状口縁を成すのかもしれない。

449~453は、同一個体と考えられる土器群で、449~452が口縁部破片、453が胴上半部破片の土器である。口縁部には低い隆帯と沈線縁取りによる渦巻き文が描出され、449に見られるように渦巻き

部が丸山状の波状口縁となる。また450で見られるように平縁部分には、連弧状の沈線とS字状の磨消結節縄文の懸垂文が見られる。これらは何れも器厚の厚い土器である。

454~461は縄文施文の土器群で、特に口縁部破片を集めた。454と456には逆U字状の沈線による区画文が、456と460、461には一条または二条の結節縄文が見られる。これらはすべて、口縁部文様帯の無い深鉢形土器群で、461は口唇部が平坦でそこに縄文が施されていることが特徴的なことである。462は黄褐色の器厚の厚い深鉢形土器の口縁部破片で、器面には横位に二条の平行沈線とその内側に二条の磨消結節縄文が施されている。また縦位にも、直線の沈線と波状の沈線が施されている。463は、口縁部まで逆U字状の区画文の施された深鉢形土器の口縁部破片で、口唇部が平坦に仕上げられている。464は、単純口縁の深鉢形土器口縁部破片で、器面には細い縄文が沈線の間に施されており、口唇部内面にも同じ原体が施文されている。465は、無文の器面に半裁竹管状工具の内皮面使用による平行沈線のつく土器で、内面の仕上げから浅鉢形土器の可能性のある土器である。胎土の色も他の土器と違い、薄灰色を呈している。

466~490には、深鉢形土器の胴部破片の土器を集めた。466は、竹管状工具により逆U字状の区画 文が施された土器で、区画の内外は無文である。467は、隆帯により区画された内側を半裁竹管状工具により平行沈線を施した土器である。他の土器と違ってやや暗茶褐色の土器で、時期的にも古くなると考えている。468と469は、隆帯上に連続する円形刺突文のつく土器である。468は暗茶褐色、469は暗黄褐色と違いがあり、胎土や施文状況の点で違いのある土器である。470は、竹管状工具の外皮面を使用した沈線と半裁竹管状工具による平行沈線等が施された土器である。471と472は、隆帯上に半裁竹管状工具による刻みが施されていることと、隆帯に沿って竹管状工具による浅い沈線が施されていることが特徴である。あわせて472には、隆帯内側に縄文施文が施されている。473には縦位方向に沈線文が見られ、そこに二条の結節縄文が確認できる。胎土の色が当該地域に見られるものと違い、暗灰色を呈している。474は磨消結節縄文土器で、二条の結節を確認することができる。475も磨消結節縄文土器で、逆U字状の沈線区画内側に二条の結節が確認できる。

476~485は、縄文施文の地文に箆状もしくは棒状、竹管状工具で沈線による区画で文様が描かれたものである。483の沈線は、区画の沈線と波状懸垂文の組み合わさったものである。486と487は、無文の地文に竹管状もしくは棒状工具によって浅い沈線文を描出したものであるが、486は器厚が厚く大型の深鉢形土器、487は器厚がやや薄くて434・435に似たやや小型の深鉢形土器と思われる。488は櫛状工具により描出された平行沈線文土器で、深鉢形土器の胴下半部に位置する土器片である。489は無文の地文に「ハ」の字状の文様が描出された土器で、深鉢形土器の胴部に位置する破片である。490は、無文の胴部下半、底部直上に位置する部位の土器破片で、器面の内外面共によく撫でられた土器である。

491と492は深鉢形土器の底部破片で、器厚が厚く重量感のある土器である。491の上部に隆帯の残 欠があることから、胴下半部に隆帯による文様描出のある土器と考えられる。

493と495は器台形土器で、つまみ上げるように貼り付けられた低い隆帯が縦位に施文されている。 台の平らな部分は、よく撫でて仕上げられている。494は、器形のよくわからない土器である。破片 の傾き、仕上げ状態から493と495同様に台形土器にならべた。

次に石器であるが、497は直径 6 cm前後、厚さ 4 cm位を測る大きさの磨石で、両面ともよく使われている。石材はキラキラした鉱物が混入する片麻岩で、重さは275 g を量る。498は直径 8 cm前後、厚さ 4.5 cmを測る大きさの凹石である。両面ともよく磨かれ、中央に窪みをもつ。石材は砂岩で、重さは200 g を量る。499は石皿状のもので、縦13cm前後、横11cm前後、厚さ 4 cm位を測る大きさで、両

面ともよく磨られた状態である。石材は砂岩である。500は有茎の石鏃で、黒曜石製である。501も黒曜石製の石鏃であるが、かえりの浅い凹基の無茎鏃である。

502はユーズドフレークで、石材は頁岩質のものである。503と504は共にスクレーパーで、石材は 凝灰岩質の泥岩で、静岡県西部の磐田原台地から出土する石器群と同一のものである。

第5表 縄文遺構一覧表

遺構番号	地 区	規模(m)	深 さ (m)	遺物番号
S P 3 2	B - 3	1.40×1.50	0.36	432
S P 2 5	C - 3	1.35×0.70	0.56	
J 1	D - 4	0.90×0.70	0.03	433
J 2	C - 3 , 4	0.68×	0.07	434、435
Ј 3	C - 3		0.09	436
S P 4 4	E - 5	0.35×0.40	0.25	439、440
S P 3 2	F-2	0.30×0.30	0.11	441
SP49	F-4	0.26×0.28	0.06	442、443
SP50	F-4	0.24×0.28	0.12	442、443
S P 6 2	F - 5	0.40×0.50	0.15	437
S P 0 2	G - 4	×0.35	0.22	
S P 1 1	G - 4	0.36×0.34	0.22	438

第4章 調査の成果

今回の調査では、弥生時代後期の竪穴住居跡87軒、掘立柱建物跡12棟、方形周溝墓1基と多くの遺構が確認された。それぞれの遺構について検討しながら、溝ノ口遺跡における集落の構造を考えてみたい。また、縄文時代中期後半の土器群について述べていくことにする。

1) 竪穴住居跡

平面形は、隅丸方形、隅丸長方形、円形、小判形の4類型がみられる。一般的に円形もしくは小判形から隅丸方形へと変化していくといわれているが、今回の調査では明確な変化は認められなかった。 菊川様式新段階と認められるSB40は隅丸方形であるが、同時期のSB44・73は小判形であった。

竪穴住居跡の時期は、その中心が菊川様式古段階から新段階にわたるが、中段階の時期に最も頻繁に建て替えが行われている。また廃棄穴と考えられるSK03・07・08・09の出土土器が、いずれも中段階に該当することにも対応する。実際SB28出土土器がSK09出土土器と接合した例がある。このことから、建て替えの際に不要になった土器は、大きな穴を掘り一括して廃棄していたと考えられる。SK03・07・08・09から出土した多量の土器群は、建て替えの多さを表すといえよう。

2) 掘立柱建物跡

ここでは、布掘りの掘立柱建物であるSH01について注目したい。現在県内では浜松市天王中野遺跡で1棟、磐田市匂坂中下4遺跡で1棟が確認されている。2例の遺跡では、溝ノ口遺跡同様に竪穴住居跡と一般的な掘立柱建物跡が共に確認されている。では、これらの遺跡と当遺跡検出の掘立柱建物とを比較してみたい。

天王中野遺跡は、天竜川によって形成された微高地に位置している。弥生時代の遺構は、竪穴住居跡 5 軒、掘立柱建物跡 6 棟、環濠と考えられる溝が確認されている。布掘りの掘立柱建物跡は、規模 1 間× 3 間で、柱間距離は3.33×4.91mである。柱穴は溝内に掘りこまれているが、溝の深さよりも柱穴の掘り方は深い。一方匂坂中下 4 遺跡は、天竜川によって形成された磐田原台地西縁部に位置する。竪穴住居跡 5 軒、掘立柱建物跡 3 棟が確認されている。布掘りの掘立柱建物跡は、規模が 1 間× 5 間で柱間距離は3.3×6.4mである。溝内に納まる柱穴もあるが、ほとんどが溝の掘り方からはみだしている。西辺では、溝中央より西へ片寄ってはみだしている。またここでは溝内の覆土が版築状に埋め戻されているのが確認されている。溝の深さと柱穴の深さはほぼ同一である。この 2 遺跡の布掘りの掘立柱建物跡は、他のものよりも規模の大きいものであった。溝ノ口遺跡では、1 間× 4 間の規模で柱間距離は3.1×4.5mである。溝の中央に柱穴は掘られているが、それよりはみ出すものもみられる。溝の深さより柱穴の掘り方は深い。これは天王中野遺跡と同じ傾向である。

次に他地域の様相をみていきたい。これらと同時期の弥生時代後期から古墳時代前期にかけてのものの分布の中心は、北陸西部石川県加賀地方で、その他に鳥取、島根県にかけて確認されている。特異なものとしては、兵庫県尼崎市武庫庄遺跡から弥生時代中期(IV期)があり、また滋賀県栗東町下釣遺跡では庄内段階の独立棟持柱をもつ大型の掘立柱建物が確認されている。調査例の多い石川県では分析が進められており、時期的変化やその基礎構造が明らかにされている。金沢市上荒屋遺跡、下安原遺跡、戸水ホコダ遺跡では柱穴に礎板が敷かれた状態で検出されている。また、大友西遺跡からは布掘り溝に1本の板材が横たえられていた。

溝ノ口遺跡で確認されている他の掘立柱建物跡に目を移すと、SH01より大型の掘立柱建物SH03・

05が認められる。柱穴の掘り方も直径70~90cmを測る。SH05の柱穴の中には、根固めと考えられる小礫が認められた。金沢市上荒屋遺跡の報告書(金沢市教育委員会、1995)のなかでは、布掘りの掘立柱建物と一般的な掘立柱建物は倉庫として機能し、この違いは壁構造によると推測している。当遺跡でも両タイプ共に倉庫と考えられるが、SH01とほぼ同規模、同主軸であるSH02、10になぜ布掘りが採用されなかったのか疑問が残る。今後の調査例の増加に期待するところである。

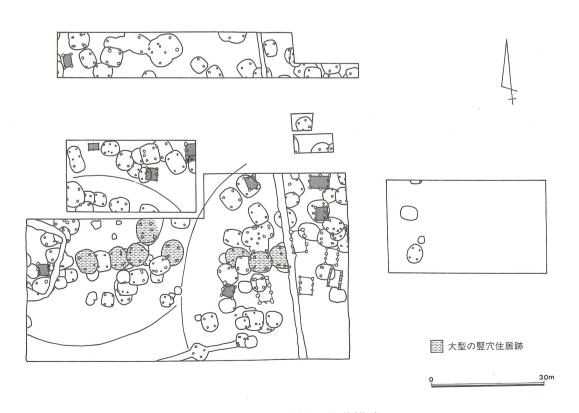
3)集落の構成

次に過去に調査された周辺地点も含めて、集落がどのように構成されていたのかについて考えていきたい。

まず集落の規模であるが、今回発掘調査した東側の調査区では、広い面積を調査したにもかかわらず、調査区の西よりに3軒の竪穴住居跡を検出したのみである。調査区の大半は竪穴住居跡の空白地帯であるため、これより東へは集落は及ばなかったと推定される。したがって、この3軒の竪穴住居が集落の東限にあたると考えられる。

次に西限であるが、今回の調査地点から北西の地点で3本の試掘トレンチをいれている(実測図版第2図参照)。その結果、東トレンチでは3軒の竪穴住居跡、中央のトレンチでは1軒の竪穴住居跡を確認した。西トレンチでは図を見てわかるように、谷部に向かっており急激に傾斜する地形であり、遺構も全く確認されなかった。地形的にみても西限は明らかである。

そして南であるが、県道を挟み南側は調査が行われておらず、詳細は不明である。今回の調査では、 調査区の南西部においては小穴は多いものの、竪穴住居跡が認められなかったこと、南東部では竪穴 住居の重複が少なくなり、小穴が多くなる傾向が窺える。したがって断定はできないが、集落の南限 に近いと推察される。



第1図 溝ノ口遺跡の集落構成

最後に北であるが、試掘トレンチ中央まで竪穴住居跡が認められている。以上のことから集落は、 東西は約130m、南北約130mにわたって広がっていたと考えられる。高田・吉岡原の縁辺部には、今 回の調査地点のように竪穴住居跡が重複関係をもつ地点が、数カ所確認されており、溝ノ口遺跡のような規模の集落が点在していたといえよう。

次にその集落内部の状況であるが、今回の調査地点では中央に竪穴住居跡の存在しない空間が広がっていることが判明した。そして以前行った北側の調査地点でも、竪穴住居群の途切れる部分が認められた。こういったことから集落内に3~4つの小グループが存在していたことが窺える。

今回の調査において、床面積は30㎡以上の大型住居跡は8軒存在した。東半部のグループでは中央に位置する住居群のS B 56・72・74がそれである。また西半部では、重複しながら東西に長く検出されたS B 31・34・36・76・80である。先に述べたグループにそれぞれ大型住居は含まれ、かつまた固まっていることがわかる。1 つの小グループは大型住居と一般的な住居によって構成され、そしてグループがまとって1 つの集落を成していたことがわかる(第1図参照)。一時期の建物配置は明確ではないが、弥生時代後期を通して、竪穴住居跡は $4\sim 5$ 回建て替えが行われていたと考えられる。これは従来から述べられている弥生集落の一般的なあり方といえる。

また、竪穴住居に付随する掘立柱建物であるが、東半部に集中する傾向があるものの、各グループ内に存在している。これより基本的に掘立柱建物は、一時期に竪穴住居が数軒からなるグループ内において管理された倉庫であったと考えられる。その中で東半部に位置するSH01・02・10の3棟、SH03・05の2棟はほぼ同規模、同主軸であった。他の建物が全く規模、主軸を異にしていることから、ある時期にグループによる管理から集落全体による管理に移行された時期があるのかもしれない。

4) その他

今回の調査では、掛川市内で初見である旧石器時代のスクレイパーを確認した。点数も少なく遺構 に伴うものではなかったが、この地域における人類の最初の営みを示す貴重な資料となる。

また、弥生時代中期の土器片が数多く出土した。当地域では縄文時代中期に集落が営まれた後、弥生時代後期まで途絶えていたと考えられてきた。しかしこれらの土器の出土は、弥生時代中期においても規模は大きくはないものの、この段丘上を生活の場として活動していた人々がいたといえる。

〈参考文献〉

「いわゆる「菊川式」と「飯田式」の再検討」『転機2号』中嶋郁夫(1988)

「東遠江における後期弥生土器編年と土器移動」『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』 中嶋郁夫(1991)東海埋蔵文化財研究会

「弥生時代~古墳時代の土器」『三沢西原遺跡』鈴木敏則(1985)菊川町教育委員会

「遠江・駿河」『YAY!』鈴木敏則(1996)弥生土器を語る会

『第1回 菊川式土器研究会 資料』(1998)

『弥生文化の研究7 弥生集落』(1986)雄山閣

『日本農耕社会の成立過程』都出比呂志(1989)岩波書店

「高床倉庫群の成立」『21世紀への考古学 桜井清彦先生古希記念論文集』平野吾郎(1993)

『梵天古墳群・匂坂中下4遺跡』(1995)磐田市教育委員会

『天王中野遺跡2』(1997)浜松市文化協会

『小松市高堂遺跡』(1990)石川県立埋蔵文化財センター

『上荒屋遺跡 弥生時代編 古墳時代編』(1995)金沢市教育委員会

『戸水遺跡群 戸水ホコダ遺跡』(1999)金沢市埋蔵文化財センター

『戸水遺跡群』金沢市教育委員会・鞍月土地区画整理組合

5) 溝ノ口遺跡出土の結節縄文土器の時間的位置づけについて

今回の調査で出土した縄文時代中期の土器は、そのほとんどに結節縄文が施文されたものであった。この結節縄文が施された土器は、遠江地域で「広野C式土器」と呼ばれている土器群である。しかし「広野C式土器」という型式名称の取り扱いについてはいろいろな見解もあることから(向坂鋼二氏や山崎克巳氏ならびに小生の論功にふれているのでここでは省くことにして)、本稿では「結節縄文土器群」と呼称した。

さて結節縄文土器は、第2図に示したように静岡県西部地域から愛知県東北部、岐阜県東部の一部と長野県下伊那地方から上伊那地方に限られた範囲に出土する土器である。したがって、この結節縄文土器を語るとき、静岡県内はもとより出土例の多い長野県や愛知県などの状況を充分参考にしなくてはならない。ところで、この結節縄文土器そのものの器形や文様の変化について調べる時特に問題はないのであるが、他型式の土器との平行関係を探る時なかなか難しい問題がある。それは、この土器は長野県下伊那地方や愛知県北設楽郡などを中心にたくさん出土していて、それも住居跡からの出土例がたくさん知られているのであるが、残念なことに共伴する別型式の土器が無かったり、共伴しても型式名のついていない土器である等の問題を抱えており、相対的な時間的位置づけができにくいのである。そこで、結節縄文土器の時間的変遷については独自に型式変化を型式論的に求めるしかなく、それ故に今だに神村透氏並びに米田明訓氏の論攷に従っての表現になっているようである。かく言う本稿でもそれらを参考にして、溝ノ口遺跡から出土した結節縄文土器群が一体どのくらいの時間的位置にあるのかを考えてみることになるのであるが・・・。

さて、今回の調査で出土した土器は住居跡等の限られた遺構や範囲から出土したものでなく、また出土した土器の大きさが随分と小さくて器形や文様の全体がよく分からないことなどから、これら出土した結節縄文土器が一体縄文時代中期後半のどの位の時期のものであるのかがはっきりとしない。そこでここでは、前述の論攷を参考にして他の遺跡から出土した結節縄文土器(第3図~第6図に掲載)そのものの変化の過程を探り、それらから類推して本遺跡から出土した結節縄文土器が概ねどのくらいの時期に当たるのかを探ろうとするものである。

それでは、今回の調査で出土した土器の特徴を大づかみに整理して、下に列記してみよう。まず ①口縁部文様帯をもつ土器がある。

出土した土器の中に口縁部文様帯を示す土器は無い。しかし、それに代わる土器として、いや言い方を変えて言うと、口縁部文様帯のある土器の可能性を示す土器として第88図の432、第89図の466、468~472、475があげられる。432の土器は胴部から底部までが残った土器であるが、文様帯は胴上半部で沈線による縦方向の楕円区画が閉じられるように抽出されるものである。と言うことはこの土器の文様構成は、おそらくその上部に口縁部文様帯を持つ土器であることが想定されるのである。文様構成と器形の点から具体的にイメージすると、大門原遺跡(飯田市)出土の土器(第3図7)や長者平遺跡(袋井市)出土の土器(第4図12)がこれに該当する。同じように466と475の土器が、同様の文様構成を示す土器であると考える。次に468~472の土器群であるが、これらは大門原遺跡や長者平遺跡などで多く出土している深鉢形土器に見られるもので、口縁部文様帯と胴部文様帯の間に貼り付けられた低い隆帯上に加えられた連続刺突や刻みを持つ土器である。ということは468~472の土器も口縁部文様帯をもつ土器の破片であると想像される。

②結節縄文土器には「結節縄文施文の土器」と「磨り消し結節縄文の土器」がある。

結節縄文施文の見られる土器には、第89図456、460、461、472、473がある。それに対し、縄文が 磨り消されて結節の回転痕のみが器面に残された土器として、第88図432、450、第89図462、474、47 5がある。

③口縁部文様帯が無く、口縁部から胴部へと文様が縦方向に表現される土器がある。

沈線により「∩」状の区画文が口縁部に認められる土器として、第89図454、456、463があり、465もこれらの仲間のようにも見て取れる。他に第88図450、第89図460、461は、口縁部から結節縄文が胴部に向かって垂下するものと思われる。尚、462の土器は、結節文が口縁部に二条巡り、その直下に胴部に向かって沈線が垂下していくものである。この土器も口縁部文様帯の無い土器の一種類として、認めても良いのかもしれない。

以上が今回の調査で出土した土器群の特徴である。

次に、上記に掲げた土器と似た土器を他の遺跡の出土資料から幾つか選び出し、第3図~第6図に並べて本遺跡出土土器と比較してみることにする。第3図1~4の土器は大門原遺跡(飯田市)SB18出土の土器で、5~9は同じ遺跡のSB25出土の土器群、第4図10~21は長者平遺跡(袋井市)出土のj類土器群、22~30は牛岡遺跡(掛川市)出土の土器群、第5図31~54はヒロノ遺跡(愛知県稲武町)SB2出土の土器群、第6図55~60は恒川遺跡(飯田市)ARB6号住出土土器群、61~65が同じ遺跡の8号住出土の土器群で、66~69が増泉寺付近遺跡(飯田市)27号住出土の土器群である。これらは神村透氏の分類に従い、まず「結節を伴わない縄文施文の段階」のものとして大門原遺跡SB18の例を掲げ、次に「結節を伴う縄文施文の段階」の土器群として大門原遺跡SB25、長者平遺跡をその例とし、「結節縄文施文土器から縄文を磨り消して、結節のみが残される段階」の土器群の例として牛岡遺跡、ヒロノ遺跡を掲げた。そして最終段階として、「施文された縄文が磨り消されてほとんど結節の回転痕のみ」となった土器と、「口縁部文様帯が無くなり「○」状の縦方向の区画文が口縁部から胴部にかけて認められる」土器等を出土した増泉寺付近遺跡の例を取り上げた。

さてここで、この結節縄文土器の変化する過程に本調査で得られた土器群をあては得てみると、磨り消し手法により縄文が無くなって結節のみが残される段階のものから、口縁部文様帯が無くなって「○」状の縦方向の区画文が口縁部から胴部にかけて認められる土器の段階、最終段階に相当する土器群に相当していることが分かる。遺跡名で言えば「牛岡遺跡」や「ヒロノ遺跡」の例に近く、最終的には「増泉寺付近遺跡の27号住」の例と同時期のもであるということが分った。

次に、他型式の土器との平行関係を考えてみよう。結節縄文土器と類似する「加曽利E式」土器の変化の例と見比べてみると、結節縄文の発生した頃の文様構成は「加曽利E3式」期に見られる口縁部文様帯と同部文様帯が連結する文様構成と同じであることから、結節縄文が施文された時期は加曽利E3式期の頃と考えたい。次に最終時期の文様構成を見ると、口縁部文様帯が消失して「○」状の縦方向の区画文が口縁部から胴部にかけて認められる土器で、これは「加曽利E4式」期に共通する文様構成である。このことから、結節縄文土器の最終末は加曽利E4式の最終末に対比されるものと理解したい。付け加えて器形の上から考えてみると、結節の回転痕のみが施文される土器の器形は胴部から口縁へと単純に開いていくものが多いが、これは後期の土器の器形に繋がっていくものであり、このことからも中期後半最終末の時期であることを示しているものと考える。

以上のことからまとめると、今回の調査で出土した結節縄文土器群は、加曽利E3~E4式終末に 平行する時期のものであると結論づけたい。そして、結節縄文土器の変化の過程で言うと、最盛期を 過ぎた終盤から最終段階の時期のものと結論づけたい。 (了)

(参考文献・引用文献)

- (1)向坂鋼二「遠江における縄文土器の変遷」「遠江考古学研究4」(1970)遠江考古学研究会
- (2)加藤(旧姓戸塚)賢二「広野C式土器」なうNo3.5(1972)
- (3)神村 透「結節縄文をつけた一群の土器」「中部高地の考古学」(1978)長野県考古学会
- (4)米田明訓「南信天竜川沿岸における縄文時代中期後半の土器編年|

「甲斐考古17-1(Vol.40)」(1980)山梨県考古学会

- (5)八木光則「縄文中期集落の素描(1)」「長野県考古学会誌25」(1976)長野県考古学会
- (6)大橋保夫他「広野遺跡」「森町考古17」(1981)森町考古学研究会
- (7)向坂鋼二「縄文時代の重要遺物」「静岡県史 資料編3 考古三」(1992)静岡県
- (8)瀬川裕市郎「東海地方の縄文土器」「日本土器辞典」(1996)雄山閣
- (9)山崎克巳「静岡県西部における縄文時代中期後半土器群の様相」

「静岡県史研究13号」(1997)静岡県 史編纂室

- (10) 「駿河山2号墳発掘調査報告書 | (1983)金谷町教育委員会
- (11)「鹿島遺跡発掘調査報告書」(1992)菊川町教育委員会
- (12)「千駄ヶ原遺跡群1地点」(1986)菊川町教育委員会
- (13)「善福寺遺跡発掘調査報告書」(1994)菊川町教育委員会
- (14)「長者平遺跡」(1984)袋井市教育委員会
- (15)「牛岡遺跡発掘調査報告書」(1995)(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- (16)「掛川市遺跡分布調査報告書」(1984)掛川市教育委員会
- (17)「森町史 資料編一 考古」(1998)森町
- (18)「磐田市史 資料編一 原始·古代·中世」(1992)磐田市
- (19)「豊田町誌 資料集 原始·古代·中世編」(1998)豊田町
- (20)「静岡県豊田町広野北遺跡発掘調査報告書」(1985)豊田町教育委員会
- (21)「下滝遺跡群 浜松市半田土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」(1997)

(財)浜松市文化協会

- (22)「春野町史 資料編一 原始・古代・中世」(1994)春野町
- (23) 「宝平遺跡 | (1997)水窪町教育委員会
- (24)「恒川遺跡群」(1986)飯田市教育委員会
- (25)「増泉寺付近遺跡」(1996)飯田市教育委員会
- (26)「三尋石遺跡」(1999)飯田市教育委員会
- (27)「黒田大明神原遺跡」(1997)飯田市教育委員会
- (28) 「大門原遺跡」(1999)飯田市教育委員会
- (29)「ヒロノ遺跡 第2次調査報告書」(1999)稲武町教育委員会
- (30)「芋川遺跡」(1995)刈谷市教育委員会
- (31)「東平遺跡発掘調査報告書」(1997)新城市教育委員会
- (32)「観音前遺跡発掘調査報告書」(1999)新城市教育委員会
- (33)「御嶽神社里宮遺跡発掘調査報告書」(1978)王滝村教育委員会
- (34)松本一男「結節縄文土器の伝播とそれを可能にしたもの」

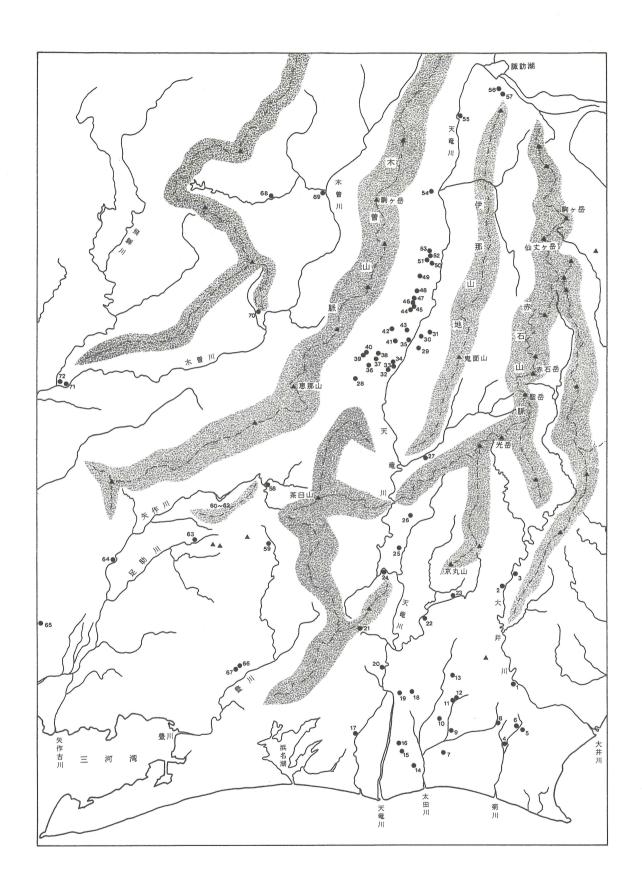
「静岡県考古学研究No31」(2000)静岡県考古学会

結節縄文土器出土遺跡一覧(1)

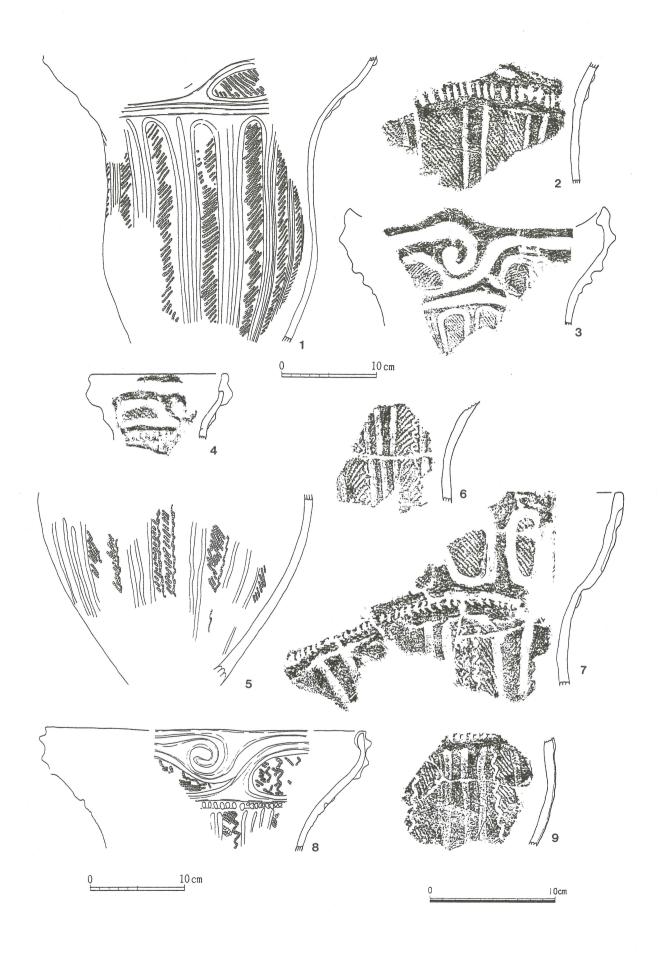
No.	遺跡名		所 在 地	当該土器出土遺構	参考文献
1	駿 河 L	計 静岡!	具榛原郡金谷町駿河山		(10)
2	上 長 厚	E //	榛原郡中川根町上長尾		(6)
3	川根高校校園	Ē //	榛原郡中川根町徳山		(6)
4	鹿	1 /	小笠郡菊川町半済	詳細不明	(6)(11)
5	千駄ヶ原	į "	小笠郡菊川町吉沢	詳細不明	(6)(12)
6	善福	= //	小笠郡菊川町富田		(13)
7	長 者 ご	Ē //	袋井市豊沢		(14)
8	牛	1 //	掛川市八坂		(15)
9	岡 津 原	Ĭ //	掛川市岡津		(6)
10	溝ノ口] //	掛川市吉岡		
11	萩 ノ 县	2 //	掛川市原里		(16)
12	上ノ見	2 //	掛川市原里		(16)
13	鍛冶	i //	周智郡森町鍛冶島		(17)
14	西貝	Ē //	磐田市西貝塚	詳細不明	(6)(18)
15	広 里	F //	磐田郡豊田町富丘	2 号住	(19)(20)
16	気 賀 夏	į "	磐田郡豊田町富丘	詳細不明	(6)
17	下滝遺跡郡	Ė //	浜松市半田		(21)
18	井 の 」	_ //	磐田郡豊岡村敷地	詳細不明	(6)
19	大 楽 🗧	Ê //	磐田郡豊岡村大楽寺		(6)
20	日 月	月 //	天竜市日明		
21	ヒラシロ	1 //	天竜市柴		
22	里	Ę //	周智郡春野町宮川		(22)
23	杉グミノサワ	7 //	周智郡春野町杉		(22)
24	半	<u>"</u>	磐田郡佐久間町		(6)
25	南 野 日	1	磐田郡佐久間町		(6)
26	宝	Ē 11	磐田郡水窪町長尾		(23)
27	十	長野!	具下伊那郡南信濃村南和田	3 号住、3 号住	(3)
28	北垣夕	<i>"</i>	下伊那郡阿智村智里	1号住、埋ガメ	(3)
29	城 本 5	7	下伊那郡喬木村帰牛原		(3)
30	伴 野 原	Ę //	下伊那郡豊丘村伴野		(3)
31	田 村 原	į "	下伊那郡豊丘村神稲		(3)
32	前 の 原	Ę //	飯田市竜丘桐林		(3)
33	北	Ξ //	飯田市竜丘駄科		(3)
34	宮切	Ž //	飯田市竜丘駄科		(3)
35	恒 丿	"	飯田市座光寺	5、6、8、12号住等	(24)
36	上の平東部	ß "	飯田市大瀬木	1、2号住	(3)

結節縄文土器出土遺跡一覧(2)

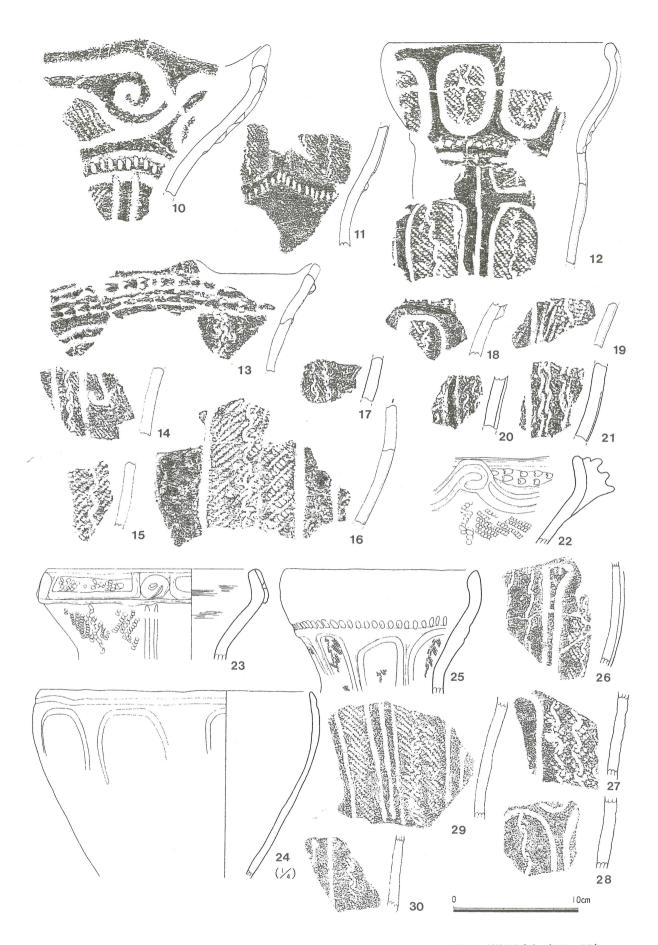
No.	遺跡名	所 在 地	当該土器出土遺構	参考文献
37	酒屋前	長野県飯田市大瀬木		(3)
38	滝 沢 井 尻	〃 飯田市大瀬木		(3)
39	増泉寺付近	〃 飯田市大瀬木	27号住	(25)
40	三 尋 石	〃 飯田市大瀬木	S B 25	(26)
41	黒田大明神原	勿飯田市上郷黒田	S B 13	(27)
42	大 門 原	ø 飯田市座光寺	S B 19, S B 51	(28)
43	角 田 原			(3)
44	増 野 新 切	〃 下伊那郡高森町山吹		(3)
45	川 子 石	〃 下伊那郡高森町山吹		(3)
46	庚 申 原			(3)
47	里 見	〃 下伊那郡松川町大島		(3)
48	吉原			(3)
49	尾越	/ 上伊那郡飯島町七久保		(3)
50	山 溝	/ 上伊那郡飯島町飯島	5 号住	(3)(29)
51	藤 助 畑	〃 駒ヶ根市赤穂中割		(3)
52	塩木	〃 駒ヶ根市赤穂地割	,	(3)
53	富 士 山	〃 駒ヶ根市赤穂北割		(3)
54	富士山下	/ 伊那市西春近		(3)
55	樋口内城館	/ 上伊那郡辰野町樋口		(3)
56	本 城	/ 諏訪市湖南北真志野		(3)
57	荒 神 山	/ 諏訪市湖南南大熊		(3)
58	ヒロノ	愛知県北設楽郡稲武町大野瀬	S B 2	(29)
59	長尾	〃 北設楽郡設楽町東納庫	詳細不明	(3)
60	前 畑	/ 東加茂郡旭町牛地		(3)
61	久 保 田	/ 東加茂郡旭町牛地		(3)
62	万 場 垣 内	/ 東加茂郡旭町牛地		(3)
63	大 屋 敷	東加茂郡足助町川面		(3)
64	船 塚	〃 豊田市荒井		(3)
65	芋 川	〃 刈谷市芋川	J 1 号竪穴住居	(29)(30)
66	東平	〃 新城市豊栄		(31)
67	観 音 前	〃 新城市稲木		(32)
68	里 宮	長野県木曽郡王滝村上島	,	(3)(33)
69	板 敷 野	〃 木曽福島町板敷野		(3)
70	門 垣 外	岐阜県恵那郡坂下町大門	3 号住	(3)
71	神明	〃 美濃加茂市牧野町	3号住	(3)
72	牧 野 小 山	〃 美濃加茂市牧野町	J 10号住	(3)



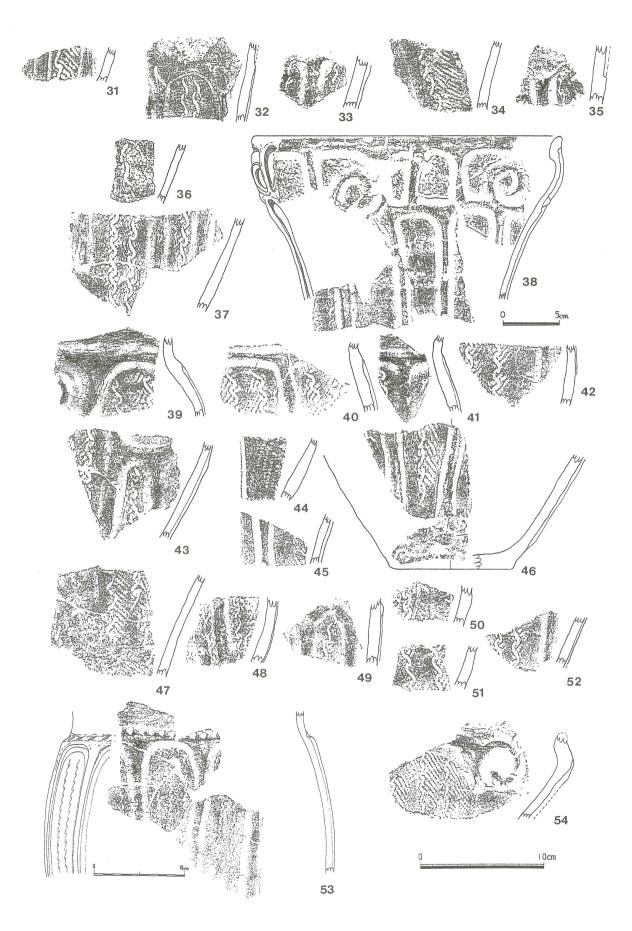
第2図 結節縄文土器出土遺跡分布図



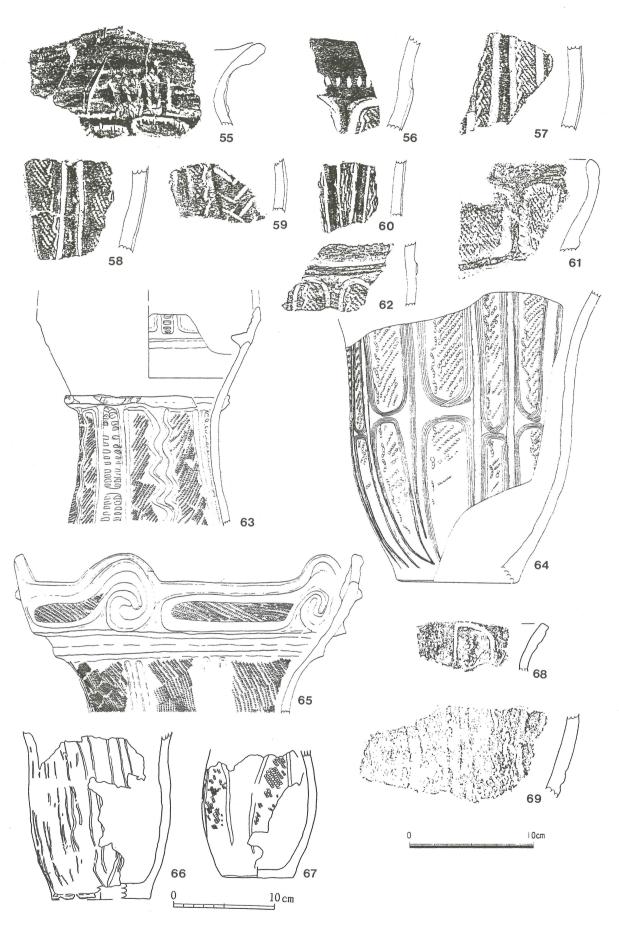
第3図 大門原遺跡(飯田市)SB18 (1 \sim 4)、SB25 (5 \sim 9)



第 4 図 長者平遺跡(袋井市)、j類土器群(10~21)、牛岡遺跡(掛川市)(22~30)



第5図 ヒロノ遺跡(愛知県稲武町)SB2 (31~54)



第6図 恒川遺跡 (飯田市) ARB 6号住 (55~60)、8号住 (61~65)、増泉寺付近遺跡 (飯田市) 27号住 (66~69)

第5章 おわりに

平成2年から行われてきた(株)サカタのタネに関連した発掘調査は、今回で終了することとなった。長年にわたり埋蔵文化財に対してご理解、ご協力いただいた(株)サカタのタネには深く感謝したい。

和田岡は、掛川市内で最も多く発掘調査が行われてきた地域である。それにより古代の様相が次第明らかにされてきた。しかし、今回の調査の中で旧石器時代の遺物が初めて確認されたように、まだ未知なる事が土中に埋もれているのも事実であり、また和田岡古墳群が造られた時代については、不明な事柄が多い。埋蔵文化財は、豊かになった現代の社会に至るまでの過程を知る貴重な財産である。とはいえ、まだ埋蔵文化財に対し厳しい批判が聞こえることも事実である。今後少しでも地域の人々に身近なものとして受け入れられるよう努力していきたいと思う。

最後に現地作業及び報告書作成にあたり以下の機関、人々にご協力、助言を賜った。ここに記して深く感謝の意を表したい。

安藤寛、飯塚晴夫、岩瀬彰利、粕屋伸子、金森俊行、加藤賢二、河合修、佐口節司、篠原修二、 佐藤由紀男、鈴木敏則、鈴木一有、竹内直文、富樫孝志、出越茂和、濱崎雅子、松井一明、 向坂鋼二、森伸一、山崎克己、吉川金利 (敬称略) 石川県立埋蔵文化財センター、飯田市教育委員会、金沢市埋蔵文化財センター、豊田町教育委員会 天竜市教育委員会、水窪町教育委員会

報告書抄録

ふりがな	みぞの	くちい	せき				-		
書名	溝ノ口流	貴跡							
副書名	(株)サ	カタの	タネ研究	棟及び付帯	施設建	設に先立	つ埋蔵文化	比財発掘調	查報告書
編著者名	井村	広		松	〉本	一男		,	
編集機関	掛川市	教育委員	員会						
所 在 地	₹436-	8650	静岡県掛	川市長谷7	0 1番:	地の1	TEL (0	537) 2	21-1158
発行年月日	西暦	2 0 0	0年3月	15日					
			コ	- F			調査		
所収遺跡名	所 在	地	市町村	遺跡番号	北緯	東 経	期間	調査面積	調査原因
	静岡県掛	川市			50度	133度	19970416	3,650	(株)サカタのタネ
溝ノ口遺跡			22213	2 2 7	78分	84分	~	m²	研究棟及び
	吉岡字漳	事ノ口			00秒	00秒	19971203		付帯施設建設
					. 44-				
							,		
所収遺跡名	種 別	主な	時代	主な道	遺構	主な	遺物	特記	事項
		旧石器	导時代			スクレー	-/°		
溝ノ口遺跡	散布地	縄文時		小穴		縄文土器	n n		
		弥生時		竪穴住居跡	f	弥生土器		布掘りの	掘立柱建物跡
			~	掘立柱建物				検出	
		古墳時	 卡代前期	方形周溝墓	THE STATE OF THE S				

溝ノ口遺跡

(株)サカタのタネ研究棟及び付帯施設建設に先立つ 埋蔵文化財発掘調査報告書

平成12年3月15日

編集発行 掛川市教育委員会

掛川市長谷701-1

TEL 0537-21-1158

印刷 所 松本印刷株式会社

榛原郡吉田町片岡2210

TEL 0548-32-0851

